

「寛永通宝」1枚)が出土している事実をも考え併せると、中世以降におけるなんらかの遺構である可能性が比定しがたい。

B地区

明神山18号墳(図版第二一～二三、第29～31図)

墳丘

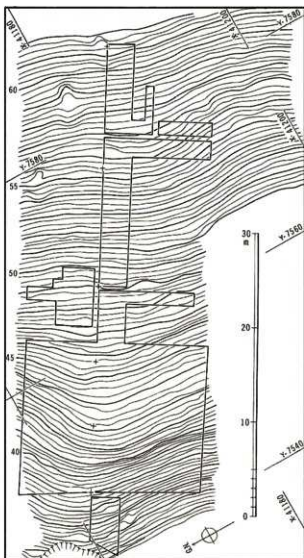
明神山12～17号の北方約70m、わずかに支脈状を呈する丘陵稜線上に所在する円墳である。

発掘に着手する以前の本古墳は、地表観察では墳丘のより高所に溝を確認しえず、周囲とは異なるわずかな緩斜面の存在がかるうじて注意を引く程度であった(第28図)。

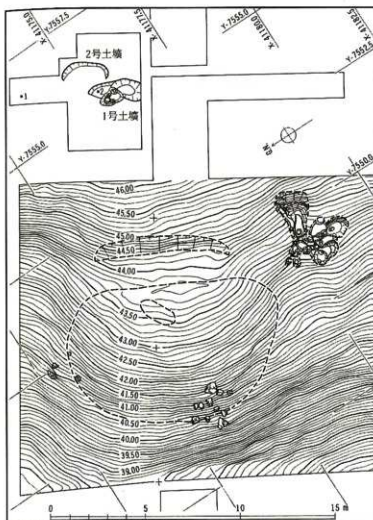
発掘による表土・流土除去後の形状は明確で、基底線は全周を検出した。

本古墳も、丘陵のより高所を溝で断ち切って築造している。この溝は、丘陵の稜線に直交する形に長さ約7.2m、上端幅2.4～3.0m、下端幅1.2～1.7mの弧状に掘り込んだものである。古墳築造以前のこの箇所では、地表は約19°の傾斜面をなしていたと推定しうるので、築造にあたっては丘陵を深さ0.3mばかり掘削してことになる。ただし、溝底面の最高所と墳頂部の最高所との比高差はわずかに0.1mを測るに過ぎない。溝の埋土は、東部・西端部の黄褐色粘質土と西部の黒色粘質土からなる。前者は、古墳築造後比較的早い時期の崩落土、後者は、それに遅れて流入した有機物を含む堆積土である。埋土から土師器片2個が出土している。

墳丘の平面形は、やはり丘陵斜面上に築造した古墳の常として整った円形をなさず、東西に長い偏円形を呈している。測量図から墳丘の規模を算出すれば、東西径7.3m、南北径11.5m、高さ3.6mになる。墳丘の西部では基底線がほぼ円弧をなすのに対して、東部では直線をなしている。墳丘の基底面は、東・西両端で最も著しい高低差があり、東端が標高43.90mに位



第28図 明神山古墳群・丑寅山支群・丑寅山遺跡B地区地形測量図(縮尺1/400)



第29図 明神山古墳群北寅山支群・
北寅山道跡B地区検出遺構実測図（縮尺1/200）

N65° 30′ Eを測る。ちなみに、土壇底面は地表面下0.6mに位置する。土壇の縁辺では、合計20個の、それぞれ長さが4～20cmの角礫が存在する。土壇は丘陵を穿って造ったもので、土壇底面は東部が西部より約10cm幅広く、かつ10cm高い。

副葬品は存在しない。

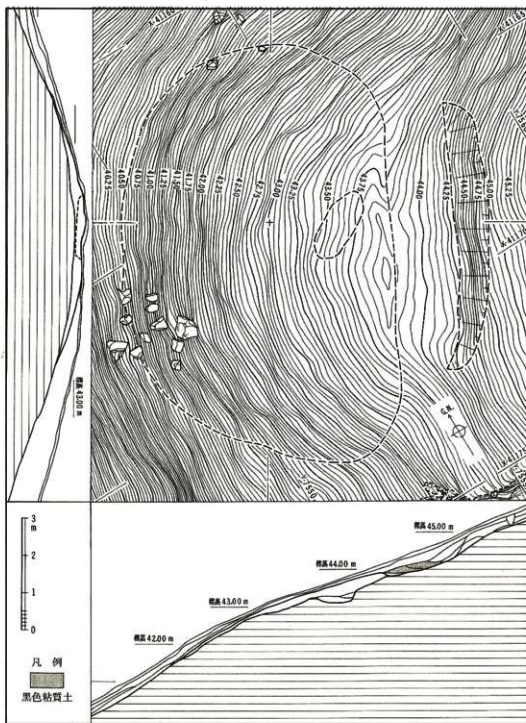
墓廬の形状からすると、本古墳の被葬者は東枕で埋葬された可能性が高い。

ところで、明神山18号墳の南方2m余の傾斜面には、土壇や柱穴状の穴の集合からなる遺構が存在している。この遺構は、東西約3.7m、南北約4.0mの範囲に広がっている。そうして、径0.6～2.5m、深さ0.15～0.35mの土壇6～8基と、径0.15～0.43m、深さ0.3～0.6mの柱穴状の穴24個とが重複したものである。ただ、柱穴状の穴は、斜めに掘り込まれており、形状も柱穴とは考えがたい

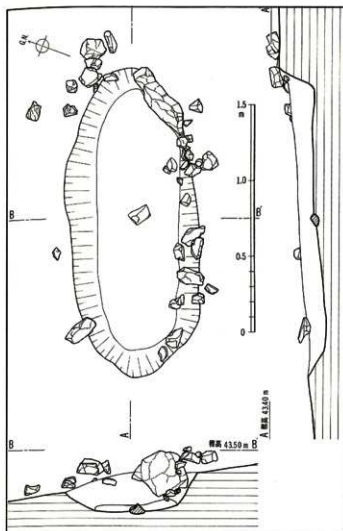
置するのに対して、西端は標高40.30mに位置しており、その差は3.6mに達する。墳丘はそのほとんどが丘陵の削り出しからなっており、盛土は墳頂部に厚さ0.3mばかり遺存するに過ぎない。墳丘の北・西南端部には、丘陵に包含されたいくつかの岩石が露頭している。

埋葬施設

本古墳の埋葬施設は、墳頂部に位置する平面形が長楕円形の土壇である。ただし、墳頂部は墳丘の東部に寄っているので、土壇も墳丘の中央部から東方に外れている。土壇の規模は、底面での長さ1.71m、幅0.45～0.55m、深さ0.15～0.22mを測る。土壇は、長軸が丘陵の後縁と斜交する形ではあるが、明神山12～14号墳とは異なって、東西に配置している。長軸の方位は



第30図 明神山18号墳丘測量図 (縮尺1/100)



第31図 明神山18号墳墓壕実測図（縮尺1/25）

例が多い。また、各穴とも炭化粒か焼土塊を含み、きわめて小断片ではあるが、土師器細片をも含んでいる。この遺構が、他の古墳時代遺構からは離れて明神山18号墳のみに近接しており、土師器片を含む点を重視すれば、明神山18号墳の遺構に伴うなんらかの遺構ではないか、と考えざるをえない。

（中司）

注① ただし、かつて明神山12号墳と同13号墳の中間部にも古墳が築造されており、その後流失した可能性も、全面的には否定しがたい。

② 石室の配石は、主たる構築材、補助的な構築材、ならびに控え積み材、それらの各石の間に生じた隙間の充填材、の主に3種に分けうる。こうした配石の各個体の重量の計測結果の詳細は省略するが、側壁の主たる構築材で5～50kg、補助的な構築材や控え積み材で0.5～6.0kg、充填材で0.1～0.5kg、のそれぞれの重さを測る。また、床面の配石も同様に3種に分けることができ、主たる構築材（板石）で0.5～1.5kg、充填材（小礫）で0.1～0.2kg、のそれぞれの重さを測る。

③ 配石の重量の計測結果では、主たる構築材で16～70kg、補助的な構築材で1.5～6.0kgを測る。

2 その他の時代

その他の時代の遺構としては、B地区で検出した土壌2基がある。以下、各遺構について説明する。

1号土壌（図版第二五(1)、第32図上）

B地区明神山18号墳東方約15mの丘陵緩斜面上に位置する。土壌南北両端は崩壊しており、遺存状況は良くない。土壌上面形は不整形を呈し、墳底にも凹凸を認める。規模は、上端の長さ約2.30m、幅約1.22m、深さ0.13～0.45mを測る。1号土壌の長軸は等高線と平行に南北に配しており、その方位はN25°Eを測る。なお、土壌覆土は炭化物若下を混入する暗茶褐色土を主体とする。

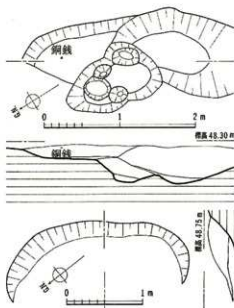
遺物は覆土中より、寛永通宝(?)1枚が出土したに止まる。

2号土壌（図版第二五(1)(2)、第32図下）

B地区明神山18号墳東方約16mの丘陵緩斜面上に位置し、1号土壌に東接する。土壌西南は崩壊しており、遺存状況は良くない。土壌上面形は楕円形を呈すものと思え、墳底は浅皿状を呈す。規模は、上端の長さ約2.41m、深さ0.26～0.51m、下端の長さ2.32mを測る。2号土壌の長軸は1号土壌と同様南北に配しており、その方位はN29°Eを測る。なお、土壌覆土は炭化物を混入する暗茶褐色土を主体とする。

遺物の出土はなかった。

(工藤)



第32図 丑寅山遺跡1号土壌実測図(上)・2号土壌実測図(下)(縮尺1/50)

3 小 結

今回調査を実施した古墳ならびに古墳時代の墳墓の詳細については、報告のとおりである。以下、判明した諸事実をもとに、明神山古墳群丑寅山支群において派生する一、二の問題について、整理を行っておきたい。

A. 埋葬施設の長軸方位について

一般に、丘陵上に古墳などを造営する場合、埋葬施設は稜線に平行するか、あるいは直交する形に配置することが通例である。そうした実態は、棺の配置にあえて思想あるいは宗教的な意義の存否を問わなくても、方形・前方後円(方)形の墳丘が丘陵の延伸に白ずから規制されざるをえないように、きわめて自然なものと解釈しうる。事実明神山古墳群丑寅山支群においても、明神山15号墳、土壌墓、堅穴式小石室はそうした典型例であり、地表の傾斜に直交する形に配置している。また、明神山16・17号墳の埋葬施設は、必ずしも正確に直交しているわけではないが、やはりそうした例に含めてよいであろう。

ところで、明神山12～14・18号墳の位置する両支脈では、明神山12～14号墳の所在するA地区の支脈が真北から62°余りの角度で、同18号墳の所在するB地区の支脈が真北から59°余りの角度で、それぞれ西方に延びている。これら各古墳の埋葬施設を正しく後線に直交させるならば、A地区では棺の北端がN28°E前後、B地区では同じくN31°E前後になるはずである。しかし、明神山12～14号墳の各埋葬施設は、真北から10°以内に東偏ないしは西偏しており、同18号墳は65°余り東偏している。したがって、これら4基はいずれも斜交しているとみなしてよからう。

明神山12～14号墳の埋葬施設の方位の差は記述のように10°前後であって、これらは遺存する墓域から算出した数値であるので、この程度の差異はほぼ同方向とみなしうる。そうして、他によるべき明確な理由の存在することが考えがたいので、いずれも後線に直交あるいは平行させるよりも、むしろ南北に向けようとした意図が顕現しているもの、と考えざるをえない。また、明神山18号墳の埋葬施設も、東西に向けようとした結果ではないか、との推測に至る。

いずれにしても、丑寅山支群の内部においては、明神山12～14号墳の3基の一群に親縁な関係が窺え、一方同18号墳は他とは異なる要素を指摘しうる。なお、明神山12～14号墳が、頭位を南方に向けていた可能性が強い点は看過しがたく、注目に値する。

B. 埋葬施設上の盛土の高さについて

次に、各古墳のうちの墳丘表面から上墳底面までの深さに注目すると、一見大きく2種に分かれているようにみえる。すなわち、一つは明神山12～14・18号墳で、土墳底面が地表面下0.3～0.6mと浅い個所に位置しているのに対して、他の一つは同15号墳で、地表面下1.26mと深い個所に位置している。

しかし、既に述べたような、明神山15号墳も上・下二段からなる墓域の上部に木棺を安置したとみる推察に大過ないとすれば、棺底面は地表面下0.7mとなり、あながち本古墳のみ深く位置していることにはならない。よって、これら各古墳の埋葬施設に木棺を埋置したものとすれば、棺上を覆う盛土はかなり薄いものとなり、その厚さは、必ずしも十分なものとはいえない。

念のためいえば、それでも最も深い、明神山15号墳は墳丘の規模が大きく、かつ、丘陵頂部に立地するが、それより浅い同12～14・18号墳は墳丘の規模も小さく、より急傾斜の丘陵後線の上に立地している。したがって、後者の一群を中心に、その多くは墳頂部の盛土がいくらか流失しているものとするのが自然であろう。そのことは、やはり封土が流失しやすい箇所に所在する明神山17号墳の竪穴式小石室や、これに南接する竪穴式小石室がともに天井石を欠いているが、天井の部材を復原・架橋した場合、地表に露出することになることから明白である。

そもそも、これら各古墳の埋葬施設の上には、どのくらいの厚さの封土を盛ったものであろう。そうした点を究明するために、これまでの周辺地方で発掘調査が実施されており、丘陵頂部に立地するなど、墳丘の遺存も良好とみてさして問題がなく、しかも、明神山12～15・18号墳と同様に木棺を埋葬した古墳を取り上げてみよう。

さて、そうした条件を具えた古墳の主要例を上げると、第4表のとおりである。これら各古墳においては、墓域底面は地表下0.7～2.0mに位置している。ただし、石川県恩塚1号墳は、その深さからみて北陸地方では異例に属すといえる。よって、一般的には地表面下0.7～1.4mに位置している

ものとみて大過ない。とりわけ、地表面下1.0m内外の例が多い。つまり、これら各古墳の木棺が割竹形であるか箱形であるかその形状はともかく、仮に木棺を復原すれば、少なくとも0.4～0.5mの厚さで棺蓋上を盛土が覆っていたことになる。

したがって、明神山15号墳は多少盛土が流失している可能性があり、また、同12～14・18号墳は大幅に流失している可能性が強い。(中司)

注① 参考例としては福井県大野市牛ヶ原・矢の山ヶ鼻5号墓、同6号墳、福井市中山町の中山2号墳、同市安保町の安保山1・2号墳、福井県敦賀市井川の立割2号墳、石川県羽咋郡押水町の宿東山1号墳、同県七尾市温井町の温井15号墳を取りあげた。

② 三方町郷土資料館『ふるさとへのあけぼの展（図録）』1985年。

③ 福井県教育委員会『安保山古墳群』1976年。

第4表 北陸地方の主要調査古墳における墓壇底面の深さ一覧表

番号	古墳名	所在地	墳頂からの深さ(m)
1	立洞2号墳	福井県敦賀市井川	1.1～1.2
2	向出山2号墳	福井県敦賀市吉河	0.7
3	安保山1号墳	福井県福井市安保町	1.0
4	安保山2号墳	福井県福井市安保町	1.3～1.4
5	中山2号墳	福井県福井市中山町	1.2
6	山ヶ鼻6号墳	福井県大野市牛ヶ原・矢	1.0～1.1
7	井江陵10号墳	福井県坂井郡芦原町	1.4
8	宿東山1号墳	石川県羽咋郡押水町	0.9
9	温井15号墳	石川県七尾市温井町	0.7
10	尼塚1号墳	石川県七尾市国分町	2.0
11	尼塚2号墳	石川県七尾市国分町	0.7

第2節 遺物

1 古墳～律令時代

古墳～律令時代の遺物としては、刀子、土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。しかし、これらは小破片が多く、逆に図化しえたものは少なく第33・34図のみである。これらのうち、明確に遺構に伴うものはごく一部であり、大部分のものは遺構より遊離した状態で出土している。詳細は土器観察表に譲るとして、以下に概要を述べることにする。

A. 刀子 (第33図)

明神山17号墳の埋葬施設の堅穴式小石室出土である。身部先端と茎部基端が欠失しており、現存長5.3cm、復元長7.5cmを各々測る。茎部の片面にわずかに木質痕の遺存を認めることができる。



第33図 明神山17号墳出土
刀子実測図 (縮尺1/2)

B. 土師器 (第34図1～4)

土師器のうち図示し得たものは、完形のもの2点、壺の口縁部から頸部にかけての破片1点と、寛の底部の破片1点のみである。また、このほかにも多量の小破片が出土している。(1)と(2)は、ともに発掘以前には古墳ではないかと推測していた、明神山14号墳の南方に約10m離れた箇所(旧16号墳)の出土である。(1)は、頸部が大きく外湾しながら口縁部に至るものであり、口縁部は外側に粘土帯を巻きつけ複合口縁としている。口縁部文様帯上には3条を1単位とする棒状浮文を4ヶ所に貼り付けるものと想定され、その間には直径8mmの竹管文を刺突している。(2)は、強いハケ目調整をおこなっている。(3)と(4)はともに土壇墓出土である。(3)は、球形を呈する体部に短く外湾する頸部がつき、口縁部は外湾しながら大きく開く。底部は焼成後に穿ったと考えられる直径2cmの穿孔が認められる。(4)は、やや長胴形の体部に弱く「コ」の字状を呈した頸部を有する。(3・4)とも胎土、焼成ともに類似している。

C. 須恵器 (第34図5～17)

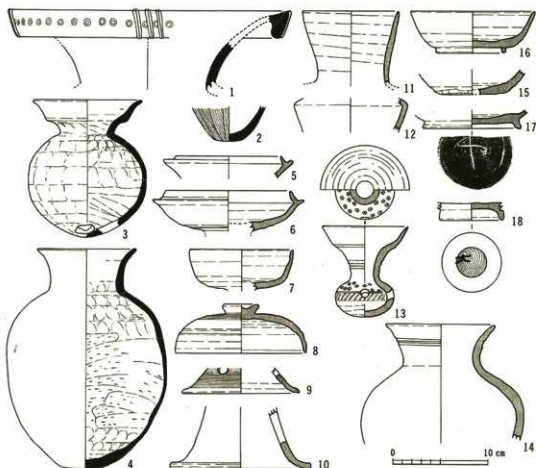
須恵器は、小破片も含めて割合多く出土しているものの、図示し得たものは13個のみである。これら、大きく古墳時代に属するもの(5～13、15)と、律令時代に属するもの(14・16・17)の2種類に分けることができる。これらのうち(6、13)は15号墳の南・北両端部の流土中出土であるが、(8・9・15)は16号墳に伴うものであり、他のものは遺構から遊離した状態で出土している。胎土や焼成などにおいて共通するものがほとんどないことから、複数の生産地のものが搬入されていたと考えられる。

D. 灰釉陶器 (第34図18)

灰釉陶器は、すべての破片中、ただ1点(18)が出土しているのみである。底部中央には回転糸切り痕を残し、「大」の字の墨書が認められる。

2 小結

本稿では、今回報告した古墳～律令時代にかけての遺物のうち、時期の判別できるものについて



第34図 明神山古墳群丑寅山支群等出土土器実測図（縮尺1/4）

て述べることとする。

土師器4点のうち (1) と (2)、(3) と (4) はそれぞれ同一箇所から出土しており、その出土状況から同一時期の所産と考えられる。これらの土師器に類似する資料は、福井県内において出土例が報告されておらず、他県の資料に類例を求めなければならない。石川県小松市に所在する漆町遺跡の出土資料を分析した田嶋明人氏は、同遺跡出土の土師器を中心に詳細な編年を組まれており、(1)の壺形土器口縁部は、F類と分類されたものに類似している。^① 壺F類は漆5～8群に認められるものの、6群以前のものは頸部が肩部より直立するものであるため、本遺跡例は頸部が外湾する7群以降の所産と考えられる。報告によると、8群における壺F類は「重厚さや装飾性が失われ、退化傾向が著しく、量的にも急速に減少するようである」と規定されている。^② これらのことから、頸部が外湾し、口縁部の退化傾向の著しくない本遺跡例は、漆7群に併行するものと考えられる。(3)の壺形土器は壺C類と分類されるものに類似している。C類はさらにC1、C2類に細分されるが、

(3) は「頸部下端のほうが若干太く、外傾した口縁部下半と外反する口縁部上半をもつもの」と規定されるC1類に近いものと考えられる。壺C類は漆5～8群に認められ、その中で型的に連続しながら発達し退化していく。そのような現象が顕著に現れているのが頸部から口縁部にかけてであり、(3)の壺形土器は、その形態的特徴から(1)と同じ漆7群に併行するものと考えられる。^②

次に、比較的多く出土した須恵器であるが、(8)は田辺昭三氏による陶邑古窯跡群における編年のTK10型式に比定できる高坏の蓋である。^③ 本型式の段階に属する窯跡としては、若狭においては興道寺窯が確認されているものの、越前においては未確認である。しかし、石川県境に近い金津町内の山林においてMT15型式と考えられる蓋の破片が採集されていることから、越前に置いても本型式の段階には須恵器生産がおこなわれていたと推定することができる。^④ (6)は脚部を欠失した有蓋高坏であり、MT85型式に比定できる。本型式と考えられる窯跡は、越前では未確認であるものの、若狭においては前型式から引き続いて興道寺窯が操業していたものと想定される。^⑤ (9)の短脚高坏の脚部、および(13)の甗はTK209型式に比定される。(9)の短脚高坏の脚部は小破片であるものの、脚端部の形態から本型式に分類した。(13)の甗は、その文様構成においてきわめて特異な要素を備えており、現在のところ他に類例は知られていない。須恵器の文様構成として竹管を多用する手法は、国内においては系譜的に迫ることができず、本遺跡出土の甗は、何らかの外來の影響を受けたものと考えられる。越前における窯跡は前型式であるTK43型式より確実に認められ、本型式に属する窯跡としては加茂神社境内窯跡^⑥、野中山王窯跡^⑦、瓦谷3号窯跡^⑧をあげることができる。若狭においては、興道寺窯が引き続いて操業を行っている。(5)の無蓋高坏はTK217型式に比定できる。本型式になると越前では広瀬窯跡群において操業が開始され、以後継続的に生産が行われるようになる。^⑨

(16)の坏は、律令時代に属する遺物のうちで唯一所属時期が判明するものであり、田嶋明人氏による編年のⅢ期に比定され、実年代としては8世紀前半をあたえることができる。^⑩ 律令時代に入ってから、越前において武生南部、丹生、金津の各窯跡群が大規模に操業を行っていることが確認されているほか、若狭を含めて散発的な操業も認められる。たとえば、本遺跡から至近距離にある葉原窯跡群などがそうであるが、^⑪ こうした小規模な窯跡群と大規模な窯跡群の成立背景および、その性格などの実態は不明と言わざるをえない。

以上、明神山古墳群の今回の調査で出土した土器群を検討してきたのであるが、比較資料の少ない本県において、土壌墓出土の土器および、15号墳墳丘南部出土の須恵器甗は貴重な資料を呈示できたものといえる。

(木村)

注① 田嶋明人 「漆町遺跡出土土器の編年の考察」〔『漆町遺跡』Ⅰ、1986年〕。

② ①に同じ。

③ ①に同じ。

④ 田辺昭三『陶邑古窯跡群』Ⅰ、1966年。田辺昭三『須恵器大成』1981年。

⑤ 県教育庁埋蔵文化財調査センターによる分布調査によって採集されている。実物は、福井県立博物館において開催された「知られざる古墳時代」展に鎌谷窯跡として展示されたが、同展において?として展示された(図録P.67.写真番号111—1—3の左上)ものは、復元口径15cmを測る蓋である。筆者は、この蓋をMT15型式であると

考えている。

- ⑤ 入江文敏「興道寺宮路の概要」(『シンボジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』1988年)。
 ⑦ 白崎 卓「加茂神社窯」(『シンボジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』1988年)。
 ⑧ 水村伸行「野中王山窯」(『シンボジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』1988年)。
 ⑨ 水野九右衛門「瓦谷3号窯址発掘調査概要」1971年。
 ⑩ 松枝雅亮「瀬瀬窯址群の調査」(『福井工業高等専門学校研究紀要』人文科学第3号、1970年)。
 ⑪ 田嶋明人「古代土器編年軸の設定」(『シンボジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』1988年)。
 ⑫ 宇野康裕「敦賀市栗原跡群の概要」(『シンボジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』1988年)。

第5表 明神山古墳群丑寅山支群出土土器観察表

番号	品名	品名 (cm)	形状の特徴	表面の特徴	胎土	焼成	釉薬	備考
1	口縁	(28)	口縁から大きく外反しながら腹壁は口縁部付近で下方へ傾斜する。	口縁部に3条一對とする條状浮文を施す。この浮文を中心に3対の一對とする條状を施す。	灰緑 1~4 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	
2	底壁	(28)	底壁から内凹加味に立ち上がる。	底壁ハツリ調整。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底に10x2 cmの孔を穿つ。
3	口縁	口縁 11.3 腹壁 14.4	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
4	口縁	口縁 10.5 底壁 23.2	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
5	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
6	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
7	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
8	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
9	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
10	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
11	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
12	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
13	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
14	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
15	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
16	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
17	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。
18	口縁	(11.3)	口縁部は、短く外反する縁部より強く屈曲しながらさらに外反する。 腹壁の最大径が中央にあり、やや広幅である。	口縁部から口縁部にかけては条状の浮文を施す。 口縁部内面の上段から中段に、指痕を残すように強い屈曲を施す。7段にわたって3対の一對を施す。	灰緑 0.5~1 mmの粉粒を多量に含む。	良好	灰褐色	外底は凹状で、中央に10x2 cmの孔を穿つ。

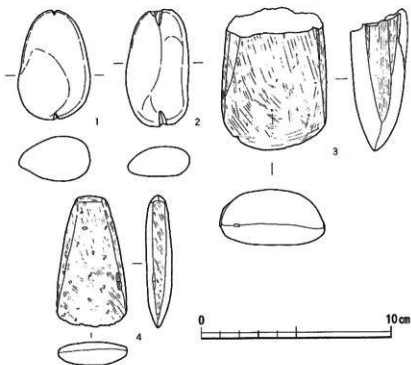
第3節 縄文時代の遺物 (第35・36図)

縄文時代の遺物の出土は少なく、第35・36図の石器以外には、縄文土器細片若干の出土を見たに過ぎない。

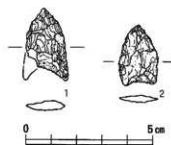
深鉢形土器には頸部片と胴部片がある。頸部片は半截竹管による断面かまぼこ状の横走沈線3条を連接施文している。地文は見られない。胴部片には地文に縄文RLを施し、併行沈線3条による下弦の弧線文を横帯させ、下縁に横走沈線2条を配するものがある。またこ

れに近似する文様を施す深鉢形土器胴部片は地文撫糸Rを施し、上弦の弧線文2条から併行沈線1条を垂下させる。なお、これら3点の所属時期は中期中葉である。そのほかにも縄文土器胴部片が2点あり、いずれも縄文LRを施している。

石器では磨製石斧、石錘、石鏃が出土した。第35図4は定角式の小型磨製石斧であり、完形で出土した。円刃を呈する刃部から基部に向い側縁が狭まる。断面は扁平な長方形を呈する。最大長7.2cm、刃部幅3.66cm、最大厚1.35cmを測る。3も磨製石斧であり、基部側が欠失する。円刃を呈する刃部から基部に向い側縁が弱く狭まっており、断面は凸湾状となる。刃部幅5.43cmを測る。いずれも安山岩製である。第35図1・2は石錘である。扁平な河原石を利用し、長軸の両端には研磨により、部分的な紐掛けを作出している。重量は1で89g、2で103gをそれぞれ量る。第36図1・2は石鏃であり、使用する石材はいずれも安山岩である。1は平面形が五角形を呈し、基部の挟りが強くやや長い脚部を作出し、左脚をおよび右脚の端部が欠失する。2も平面形を五角形とし、基部に弱い挟りを入れて、短い脚部を作出する。重量は2で1.2g、1で0.9gをそれぞれ量る。



第35図 丑寅山遺跡出土縄文時代磨製石斧・石錘実測図 (縮尺1/2)



第36図 丑寅山遺跡出土縄文時代石鏃実測図 (縮尺2/3)

第4節 ま と め

1 明神山古墳群の形成と敦賀地域における歴史的位置

各古墳の築造時期について

今回検出した9基の埋葬遺構のうち、明らかにそれに伴う出土品の存在によって、築造時期を特定しうる墳墓としては、土墳墓と明神山16号墳をあげうる。前者は、供献土器が出土しており、それらは田嶋明人氏による漆町遺跡の編年の7群に相当する。よって、4世紀前葉の築造と推定しうる。一方、後者は、副葬品の須恵器を有しており、それらは陶邑窯址群における田辺昭三氏の編年のTK10型式に相当する。よって、6世紀中葉の築造と考えうる。

ところで、明神山12～14・18号墳の4基の古墳がいずれも稜線上に所在し、埋葬施設が土墳で副葬品も欠くなど、共通する様相を有している。これらの各古墳は、その様相からみて、前～中期古墳である可能性がきわめて高いというのみで、詳細な築造時期は決めがたい。ただし、注目すべきことに、土墳墓があたかもそれら稜線上の古墳を避けて造営されたかのように、単独で存在している。この土墳墓は、その立地が平坦地や稜線上から外れた傾斜地であって、墓地造営の地形としては必ずしもふさわしい適地であるとはいいがたい。むしろ、その傾斜度からすれば、造営地としての積極的な選定理由を見出しがたい。すなわち、明神山12～15・18号墳と土墳墓とは、ほぼ同時期にあるいはきわめて近接した時期に築かれたものと考えざるをえない。

はたしてそうであれば、土墳墓は、明神山12～15号墳の立地に左右された結果、検出箇所に造営地が定まったものとなろう。言い換えると、明神山12～15号墳は土墳墓と同時期かわずかに先行して構築されたものと考えられる。

一方、明神山17号墳は、竪穴式小石室を内蔵し、その南方にも同様な竪穴式小石室が存在している。この種の小石室は、県下では武生市茶臼山古墳群に調査例をみる。ただし、周辺の古墳出土の6世紀後半から7世紀にかけての須恵器が存在するのみで、築造時期を特定するに足る確かな資料を欠いている。それでも近接する明神山15号墳などの周辺部から若干の須恵器が出土しており、そのうち一部の品（第34図13）は、明神山17号墳や竪穴式小石室に最も近接して出土しており、田辺編年のTK209型式期に相当する。したがって、この2基も6世紀後葉から7世紀初頭にかけて造営された蓋然性を考えうる。ただ、明神山17号墳の竪穴式小石室とそれに隣接する竪穴式小石室の間には、前者の側壁は後者の側壁より多少小型の石を用いており、かつ、前者は敷石を有する、という相違が介在する。つまり、前者は後者より古相を具えているので、先行するものと推察しうる。そうして、このような先後関係は、双方の立地や墳丘の有無とも矛盾していない。

以上を要するに、明神山古墳群丑寅山支群は、

I期（4世紀前葉）・・・・・・明神山12～15・18号墳、土墳墓

II期（6世紀中葉）・・・・・・明神山16号墳

III期（6世紀後葉～7世紀初頭）・・・明神山17号墳、竪穴式小石室

の順に形成されたものと推定される。

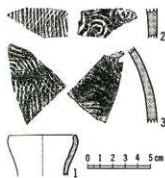
明神山古墳群の形成

明神山古墳群丑寅山支群の調査結果は以上のとおりである。

ところで、この古墳群の全体像について改めて説明すると、本古墳群は北部の四十二字丑寅山の丘陵上に所在する丑寅山支群と、南部の三十八字明神山の丘陵上に所在する明神山支群の、二支群に分けうる。ただ、後者はその立地から、さらに丘陵稜線上の高所に位置する一群（第2図では明神山北支群と表示）、低丘陵稜線上の先端部や山麓部に位置する一群（同じく明神山南支群と表示）の、二群に細別しうる。よって、ここでは丑寅山支群を北支群と言い換え、また、明神山支群の高所に位置する一群を中央支群、先端・山麓部に位置する一群を南支群とそれぞれ簡略化して呼び分け、記述することとしたい。

既に北支群については本報告で説明したので、中央支群から取り上げると、本支群は前方後方墳1基（1号墳）、円墳5基（2～6号墳）で構成されている。前方後方墳の明神山11号墳は、後方部後方が平野に面し、墳長約52mを測る。本古墳の特徴は、墳丘基底面の傾斜が大きいためか、前方部は幅が狭くその点で古相を呈しているにもかかわらず後方部より高く、後出の様相をも兼ね備えていることである。墳丘には段築と葺石を具える。ただ、段築は後方部のみが二段築成であるけれども、前方部には見られない。かつて後方部が乱掘を被っており、壙内に竪穴式石室の構築材と思われる存在が確認されたという。後方部に東接する円墳の明神山2号墳は、直径約13mを測る。立地や墳丘規模からみて、まさに明神山1号墳の陪冢的な感がある。明神山1号墳南方の円墳の同3号墳は、直径約35mを測り、古墳群内では顕著な存在である。一方、明神山1号墳の西方の稜線上には、3基の小円墳が連続して並んでいる。そのうち明神山4号墳は径約12m、同5号墳は径約12.5m、同6号墳は径約10.4mをそれぞれ測る。

以上の各古墳は、全て未調査であり、築造時期の明確な根拠を欠いている。それでも、明神山1号墳は墳形が前方後方墳で、しかも前方部の幅が狭く、埋葬施設も竪穴式石室かと推定されることなどを重視すると、まず前期古墳とみて問題あるまい。また、明神山4～6号墳は、北支群で前期とみなせる明神山12～14号墳と立地が近似している。ゆえに、中央支群は前期を中心とする造営であろう。



第37図 明神山7・8号墳出土
須恵器実測図（縮尺1/3）

次に、南支群は、前方後円墳1基（9号墳）、円墳4基（7・8・10・11号墳）で構成されている。前方後円墳の明神山9号墳は、墳丘西側面や後円部後方が平野に面し、墳長約20mを測る。後円部断面には、横穴式石室の構築材かと思える石が露呈している。その東方の円墳の明神山7号墳は、径約10.4mを測る。墳丘は宅地造成で消滅したが、須恵器片2個（第37図1・2）を採集している。明神山9号墳の後円部に北接する小型円墳の同8号墳は、やはり宅地造成で消滅したが、墳南接の溝から須恵器片1個（同図3）を採集している。一方、前方部南方の円墳の同10号墳は、径約11.6mを測る。古い時期の乱掘で、横穴式石室が露呈している。その南方の円墳の同11号墳は、径約14.5mを測る。やはり古い時期の乱掘で、横穴式石室材が散乱している。

以上の各古墳も全て未調査である。しかし、明神山7・8号墳で採集された須恵器の存在や、同9～11号墳に横穴式石室の存在が確認できることなどから、いずれも後期古墳とみなしうる。

さらに、現存こそしていないが、南支群に西接する平地には、かつて数基の古墳が存在したことが伝えられている。第1章で各古墳に関する石井氏の報文を転載した。便宜的に連続する形で号数を付けると、明神山19号墳から同25号墳が存在していたことになる。こうした消滅古墳については、今日では詳細を知りえない。ただ、石室の存在と直刀・耳環・土器などの出土を伝えるので、その大部分は後期古墳とみなして大過あるまい。すなわち、本来南支群に含めるべき一群である。

さて、そこで改めて今回調査した北支群の各古墳を列挙すれば、明神山12～15・18号墳ならびに土墳墓が前期に属しており、同16・17号墳ならびに竪穴式小石室が後期に属する。すなわち、明神山古墳群においては、なお中期古墳の存在を確定しえないが、前・中期には北支群の多くと中央支群が、後期には消滅した7基余りの古墳を含む南支群と北支群の一部がそれぞれ造営されたものと推定される。

敦賀平野におけるその他の主要古墳

次に、再度敦賀平野におけるその他の主要古墳を取りあげよう。

金ヶ崎古墳と同一の手筒山丘陵上の南端部に位置する前山古墳（第5図10）は、径約30.0mを測

第6表 明神山古墳群一覧表（一部の番号は第2図に対応）

番号	支群	古墳(遺構)名	形 状	幅(長さ)(m)	構造施設	出土品(土器を含む)	備 考
1	北支群	12号墳	円墳	約4.3	土壘		昭和60年発掘
2		13号墳	円墳	約6.5	土壘		昭和60年発掘
3		14号墳	円墳	約10.4	土壘	土師器片(2)	昭和60年発掘
4		15号墳	円墳	約16.7	土壘		昭和61年発掘
5		16号墳	円墳	約7(復原)	横穴式石室		昭和60年発掘
6		17号墳	円墳	約3.8	竪穴式小石室		昭和61年発掘
7		18号墳	円墳	約11.8	土壘		昭和60年発掘
8		土墳墓	—	—	土壘	土師器(2)	昭和61年発掘
9	中央支群	竪穴式小石室	—	—	竪穴式小石室		
10		1号墳	前方後方墳	約62	竪穴式石室?		
11		2号墳	円墳	約13	(未詳)		
12		3号墳	円墳	約36	(未詳)		
13		4号墳	円墳	約12	(未詳)		
14		5号墳	円墳	約12.5	(未詳)		
15		6号墳	円墳	約10.4	(未詳)		
16		7号墳	円墳	約10.4	(不明)	須恵器片(2)	
17		8号墳	円墳	(不明)	(不明)	須恵器片(1)	
18		9号墳	前方後円墳	約20	横穴式石室		
19		10号墳	円墳	約11.6	横穴式石室		
20		11号墳	円墳	約14.5	横穴式石室		
21		19号墳	(小塚)	(不明)	石室	金環・銅環・直刀(2～3)、土器(多数)	清城(タモの木)『敦賀通史』
22		20号墳	(小塚)	(不明)	石室	土器(多数)	清城(ショウ)『敦賀通史』
23		21号墳	(小塚)	(不明)	石室	土器(多数)	清城『敦賀通史』
24		22号墳	円墳	(不明)	石室(天井石)		清城(神社背後)『敦賀通史』
25		23号墳	円墳	(不明)	石室(天井石)		清城(神社背後)『敦賀通史』
26		24号墳	円墳	(不明)	石室(天井石)		清城(神社右)『敦賀通史』
27		25号墳	(不明)	(不明)	石室	土器	清城(鳥辺割附時見)『敦賀通史』

る顕著な存在の円墳である。墳丘には葺石を具える。その東方でやはり丘陵南端部に位置する大椋1号墳(同図11)は、やはり径約30.0mを測る顕著な存在の円墳である。ともに未調査で、築造時期は未詳である。

木ノ芽川を挟んで対岸の、丘陵北端部に位置する立洞2号墳(同図13)は、墳長約25.0mを測る北面の帆立貝形古墳である。墳丘は二段築成で、葺石を具える。割竹形木棺から素文鏡・石銅などが出土しており、4世紀後葉の築造であることが判明している。その南方の丘陵頂部に位置する向出山1号墳は、西面の造り出しを有し、径約60.0mを測る円墳である。墳丘は二段築成で、葺石を具える。埋葬施設は並列する2基の竪穴式石室で、東方の1号石室から?製四神四獣鏡・金銅装具庇付冑・同1領など、西方の2号石室から?製四神四獣鏡・横翅板鋸留銜角付冑・三角板鋸留短甲領など、多数の副葬品が出土している。また、墳頂部からも須恵器などが出土している。本古墳は、5世紀後葉の築造であることが判明している。

その南方で、釜ノ川が平野に流出する箇所の南岸丘陵の北麓部に位置する衣掛山1号墳(同図28)は、径約26mを測る群内でも傑出した規模の墳丘と周溝をもつ円墳である。埋葬施設は、大型石材を用いた横穴式石室で、出土須恵器から6世紀中葉に築造であることが判明している。

以上が敦賀地域でその存在が判明している主要古墳である。それらはいずれも首長層の動静を窺うことができる首長墳であるが、その分布は平野東部の山麓地帯に集中している。

ともあれ、4世紀から6世紀中葉にかけての地域首長墳の変遷は、明神山1号墳→立洞2号墳→向出山1号墳→明神山9号墳→衣掛山1号墳と編年しうる。各首長墳の変遷をたどると、なお各世代間に多少の断絶を察知しうるが、ただいずれにしても、明神山古墳群は4世紀初頭前後と6世紀前半に最も勢威を誇った集団の造営した古墳群と推定しうることになる。(中司)

注① 石川県立埋蔵文化財センター『漆町遺跡』I、1986年。

② 田辺昭一『須恵器大成』1981年。

③ 清水潤三・河北辰生「武生市岡本、茶臼山第1号墳の調査報告」(『武生市文化財調査報告 埋蔵文化財編』1950年)。

④ 明神山7号墳の須恵器片は、1個(第37図1)が墳丘東部、いま1個(同図2)が同南部の採集である。1は、平瓶の口縁部で復原口径5.7cm、現存高3.3cmを測る。口縁部は一旦外上方に立ち上り、端部で内傾ぎみに直立する。内外面とも横ナデ調整する。砂粒をほとんど含まない。焼成は良好で、黒灰色を呈する。口縁部の一部のみ遺存する。2は、甕の体部片である。現存高2.4cmを測る。外面は平行叩目文、内面は同心円文当具痕が残る。砂粒をほとんど含まない。焼成は良好で、内外面とも暗灰色、断面は紫灰色を呈する。明神山8号墳の須恵器片(同図3)は、南接する溝の西部埋土からの採集である。3は、甕の体部片である。現存高6.1cmを測る。外面は平行叩目文、内面は同心円文当具痕が残るが、ナデ調整で部分的に消えている。砂粒をほとんど含まない。焼成は良好で、灰色を呈する

⑤ 石井左近『敦賀市通史』1956年。

⑥ 福井県教育委員会『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』第13集、1978年。

⑦ 石井左近『向出山古墳群の出土品』(『敦賀市文化財』第2集、1960年)。森川昌和『向出山古墳群をめぐって』

(『別冊 気比史学』第2号、1981年)。福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『古河遺跡調査ニュース』4、1983年。なお、本古墳の出土品については注⑤で報告されているが、一般に異説が多いのが実状である。そこで、山口充と中司等が改めて整理を行い、注⑥文獻で報告した。ただ、1号石室出土の金銅装厩庇付冑は復原されている個数にしがって2鉢と記したが、うち1鉢は問題があるので、訂正、除外する。なお、整理にあたっては、石井左近氏のご配慮と学生諸氏の協力を得た。

⑧ 敦賀市教育委員会『衣掛山古墳群』1988年。

⑨ なお、このように推考した場合、当然のことながら5世紀前・中葉の首長墳の存在が欠落しているという疑問が生じる。ただし、明神山3号墳・前山古墳・大塚1号墳など、墳丘が比較的大規模で顕著な存在の古墳若干が、未調査であるという事実も斟酌する必要がある。

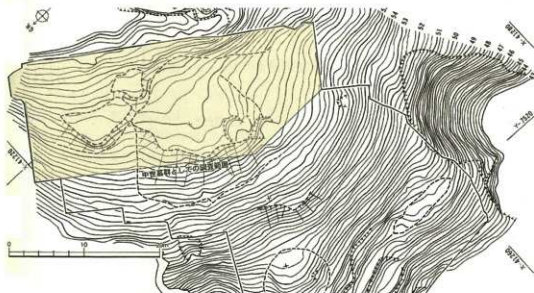
第6章 坂ノ下中世墓群の遺構

第1節 坂ノ下中世墓群の概要

中世の遺構として経塚と中世墓が、明神山古墳群丑寅山支群が並ぶ尾根のやや平野部に突き出るように眺望のいい15号墳の墳丘を中心として展開する（第38図）。遺跡の範囲としては丑寅山遺跡に含まれるが、中世の文献にも現れる「坂ノ下」の歴史的な地名を考慮し、中世墓群に限って「坂ノ下中世墓群」として呼称することは例言にて述べた。

さて中世墓には石を並べた区画墓と呼ばれるもの、石が並ばないで寄せ集めたような集石墓と呼ばれるもの、区画などがなく石造物単体に骨片が伴うものなど、形態についてのバリエーションが様々である。また区画の石が元の位置を保っていたとしても、他では骨片がまとまって出土するなかで、区画内から骨片の出土がほとんど確認されなかった例も少ないながら存在する。つまり中世墓についてはどのような遺構、どのような状況のものを中世墓として扱っていくかが問題であった。またどのような単位で1基の墓とするかも問題であった。ここでは蔵骨器や埋納施設があるものはもちろん、元位置に近いと判断した区画や集石や付近に骨片を伴う石造物についても「墓」であるとの判断で、1基の中世墓として扱うこととして事実の報告を行なっていきたい。また周辺に区画の石や石造物が見当たらないが、まとまって出土した骨片についても一覧表に取り上げて、周辺の中世墓のところで位置などを記述する。

以下、経塚・中世墓の順に説明する。

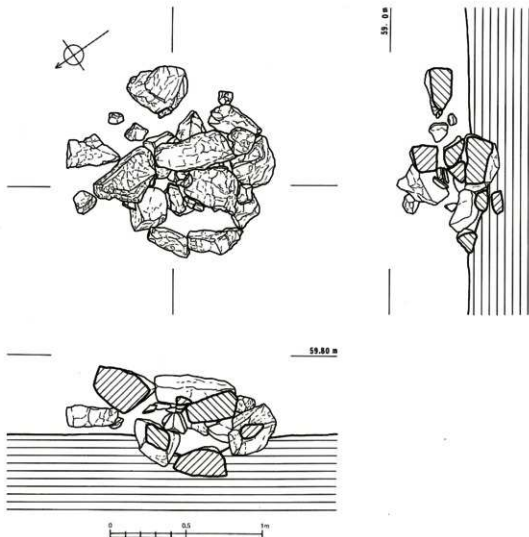


第38図 坂ノ下中世墓群の調査範囲図（縮尺1/500）

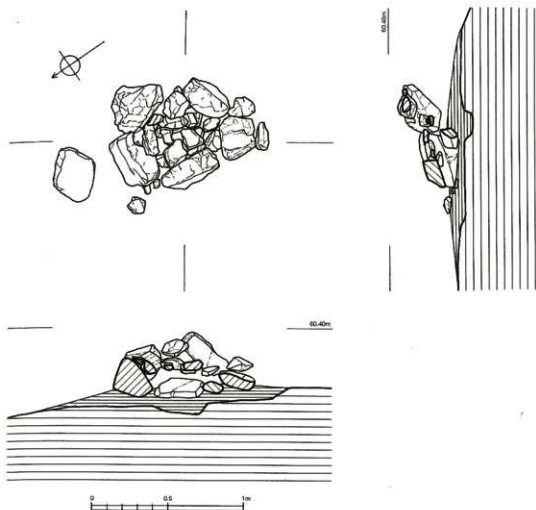
第2節 経塚

本遺跡では経塚と思われる遺構が2基ある。15号墳の墳丘斜面にそれぞれ位置する。経塚であることを具体的に示す遺物はないが、方形区画墓とは異なった形態であり、骨片等も伴わない。また中世墓の検出面に先行して造営されていたことなど、全国的な調査事例なども考慮して、ここでは経塚として扱った。

2基の経塚は中世墓の調査を終了し、古墳の調査を開始した段階で検出している。つまり経塚が埋没している土層上面に中世墓が造営されている。中世墓に先行して経塚が造営され、少なくともB群中世墓の造営よりも以前に経塚は埋没していたことになる。



第39図 坂ノ下中世墓群1号経塚 (縮尺1/25)



第40図 坂ノ下中世墓群2号経塚（縮尺1/25）

以下、それぞれの経塚について述べる。

1号経塚（第39図、図版第二六①）

1号経塚はA、B、D群中世墓の中間（15号墳溝）に位置する。後述するようにB群14号中世墓の崩壊が激しく、本経塚周辺の上面に多数の石が点在している。これらの石が一部経塚の上ののっている可能性もあるが、明確に区別することはできなかった。上面にある50cm前後の石数個を除くと、1m四方の範囲に石が方形に集中する。石は標高59.78mから59.00mに位置する。

経筒埋納坑等の下部施設は検出されず、遺物も出土しなかった。

2号経塚（第40図、図版第二六②）

2号経塚はA群中世墓とD群中世墓の間に位置する。B群北方（15号墳の墳丘斜面の上方）にあたり、同墳周溝を掘削する過程で検出した。

南北長1.04m、東西長0.72mの範囲に石が長方形に集中する。20cm×10cm前後の石が5個回り、内

側に10cm前後の石を充填する。石は標高59.94mから60.36mの間に位置する。本経塚では、集石の下で掘り方が確認できた。東北隅を検出できなかったものの、南北長1.28m、東西長1.4mを測る隅丸方形を呈する。深さ10cmを測る。さらにこの掘り方中央で、南北長35cm、東西長15cmを測る長方形の小さな坑を検出した。深さ6cmを測る。この坑に経典を埋納した可能性が強い。

遺物は1点も出土しなかった。

第3節 中世墓の概要

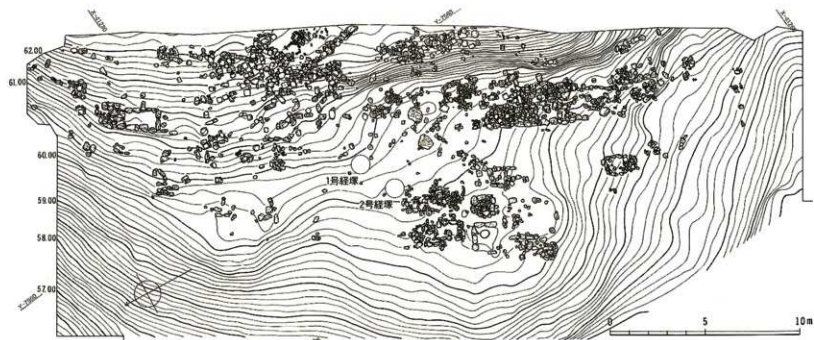
今回、調査の対象となった坂ノ下中世墓群は明神山古墳群堂坂支群が位置する尾根の標高59.50mから62.50mの緩斜面に展開する（第41図）。これらは形態やまとり方などからA～Dの4群に分けて調査した（第42図）。

A群は明神山15号墳の山側周溝に上砂が堆積して平坦になった部分に、B群は15号墳の墳丘上を中心に方形区画墓などが展開する。A・B両群は標高59.50mから61.50mの同墳頂丁部平坦面に位置し、両群の間に大きな高低差はない。C群はA・B群が位置する平坦面より1.5mから2.0mほど高いテラスの縁辺部に展開する。石造標識墓群と方形区画墓などが点在するD群は調査区の北半部で15号墳北方に位置する。標高60.30mから62.50m、傾斜が16度から17度の緩斜面に展開する。

石造物は出土総数217基に対して原位置に留まると思われるのは41基である。なかでも地輪が原位置に留まると思われる例は多い（第43図）。A・B両群には明らかに上よりの転落品と思われる石仏以外は、すべて五輪塔の空風輪、火輪、水輪、地輪などである。C群には五輪塔のほかに石仏は確実に伴うが、板碑は伴わない。D群には板碑を含めたすべての種類の石造物が伴う。

骨片は多くが方形区画墓、石造標識墓などの遺構に伴って100ヶ所出土している（第44図）。しかし、蔵骨器などの容器に納められたものは10ヶ所であり、さらに有機質容器などの存在が予想されるのは1ヶ所のみである。ほかの89ヶ所は直接土中より出土し、容器等の存在は確認されなかった。遺構に伴わず、表土掘削中に遺構・石造物などもない地点より出土したものもあるが、少量が点在するように出土しているものが多いことから、前述などの納骨地点より流出したと考えられる。

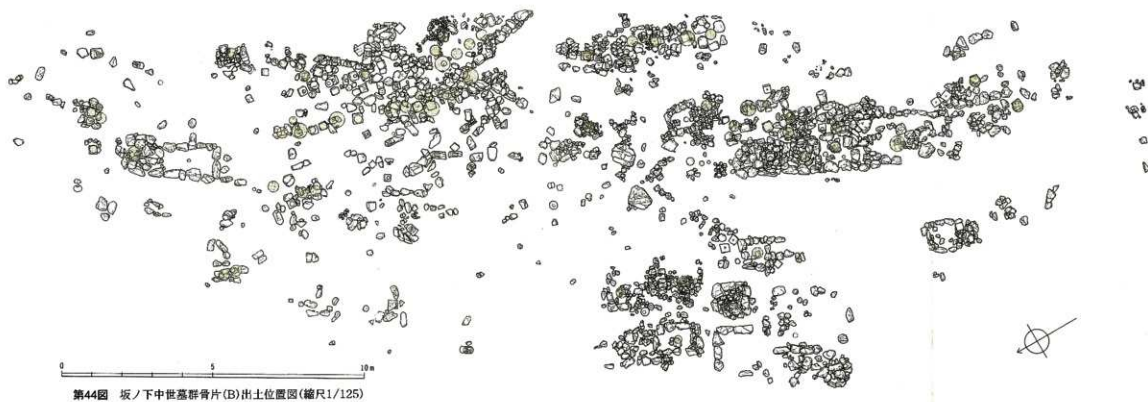
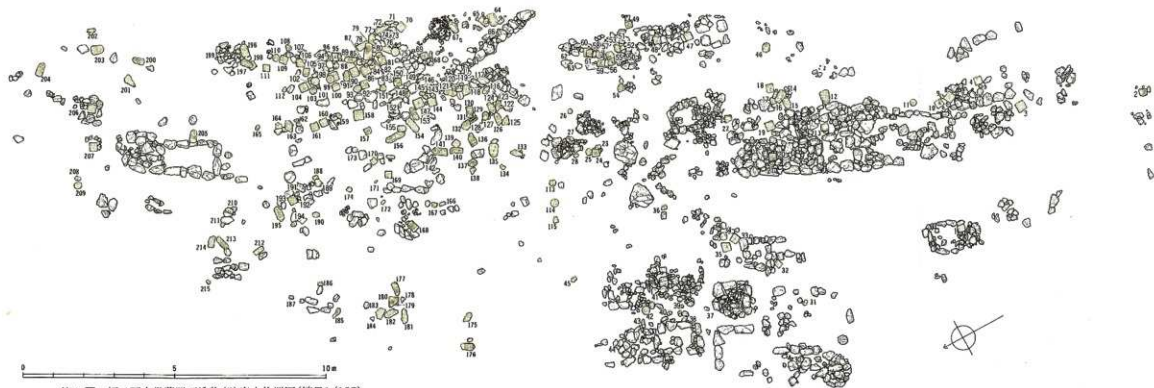
以下、A・B・C・D群ごとにまとめて説明を加えるが、その前に適確な中世墓の事実記載を行うため2・3の用語についてここでの意味を明確にしておきたい。本中世墓は石造物の種類・量ともさることながら中世墓としての形態・規模が様々である。そこで中世墓の形態について方形区画墓・石造標識墓の2種類に分けた。主にA～C群を構成する方形区画墓は、方形（または長方形）に石で区画した中世墓を指す。区画内に石を充填するか否かの違いについては考えていない。各々独立するもの、区画列を共有して連接するなどの違いはあるが、一定面積を方形に区画している状態のものについて呼称する。本遺跡では数基しかなく、単に石を集めただけの形態を呈する集石墓と呼ぶべきものがある。検出状況等より方形区画墓が擾乱を受けたものとは考えられない。人骨などが伴い墓と推定されるものは方形を意図していると考えられたので、ここでは方形区画墓に含めてある。



第41図 坂ノ下中世墓群検出状況全体図（縮尺1/200）



第42図 坂ノ下中世墓群遺構番号図（縮尺1/200）



第7表 坂ノ下中世墓群概要一覧表

群名	中世墓番号	群別番号	形式別図番号	形状	石造物	備考	備考
A (第45図)	1号墓	第46図	図版第29	方形区画	—	—	—
	2号墓	第47図	図版第29	方形区画	地輪(S3)	B1	区画の石が崩壊か
	3号墓	第48図	図版第29	方形区画	地輪(S4)	B2	山側は区画なし
	4号墓	第49図	図版第30	方形区画	—	B	常滑四耳壺
	5号墓	第50・51図	図版第30	方形区画	—	B5~B7	埋納坑
	6号墓	第52図	—	—	—	B8	—
	7号墓	第53図	図版第31・33	方形区画	地輪(S20)	B9	埋納坑?
	8号墓	第53図	図版第31・33	方形区画	—	—	—
	9号墓	第54図	図版第30	方形区画	地輪(S13・19)	B10~14	2墓に分かれる?
	10号墓	第55図	図版第33	方形区画	—	B22	—
	11号墓	第55図	図版第33	方形区画	—	B21	10号に接出
	12号墓	—	—	—	—	—	—
	13号墓	—	—	—	—	—	—
	14号墓	第57図	図版第34	石列	—	—	崩壊した区画の残欠
B (第56図)	15号墓	第58図	図版第34	石列	火輪(S30)・ 水輪(S34)・地輪(S35)	B25	崩壊した区画の残欠
	16号墓	第59図	図版第35	方形区画	火輪(S32)	B26	区画外へ五輪跡が傾斜?
	17号墓	第60図	図版第35	方形区画?	—	—	—
	18号墓	第61図	図版第36	方形区画	—	—	—
	19号墓	第62図	図版第36	方形区画	空風輪(S37)	B27	墓上が傾出?
	20号墓	第63図	図版第36	方形区画	空風輪(S38・39・40)	B28	大供片
	21号墓	第64図	図版第37	方形区画	空風輪(S43・44)	B29・30	越後壺
	22号墓	第65図	図版第37	方形区画	水輪(S41・42)	B32	—
	23号墓	第67図	図版第39	方形区画	地輪(S47)	B33・34	—
	24号墓	第68図	図版第40	方形区画	地輪(S48)	B35・36・37	—
C (第66図)	25号墓	第69図	図版第40	方形区画	火輪(S46・50・61)・ 水輪(S58)・ 地輪(S5・57・60)・ 石仏(S60)	B38・39・40	遺物(S55)の下から使用出土
	26号墓	第70図	図版第41・42	大型の方形区画	空風輪(S66)・水輪(S69)・ 空風輪(S64・65・67)・如來(S68)	B41~48	—
	27号墓	第72図	図版第43	石造標識	地輪(S118)	B49	—
	28号墓	第72図	図版第43	石造標識	石仏(S119)	B50	—
	29号墓	第72図	図版第43	石造標識	石仏(S120)	B51	—
	30号墓	第72図	図版第43	石造標識	石仏(S121)	B52・53	—
	31号墓	第73図	図版第44	石造標識	地輪(S144)	B54・55	—
	32号墓	第73図	図版第44	石造標識	地輪(S147)	B56・57	—
	33号墓	第73図	図版第44	石造標識	石仏(S152)	B58・59	区画の石あり?
	34号墓	第74図	図版第44	石造標識	地輪(S158)	B62	—
D (第77図)	35号墓	第75図	図版第44・45	石造標識	空風輪(S159)	B63	越前壺
	36号墓	第75図	図版第44・45	石造標識	地輪(S160)	B64	—
	37号墓	第75図	図版第44・45	石造標識	地輪(S161)	B65	—
	38号墓	第75図	図版第44・45	石造標識	空風輪(S162)	B66	越前壺
	39号墓	第75図	図版第44・45	石造標識	空風輪(S165)・板碑(S163)	B68	—
	40号墓	第76図	図版第46	石造標識	地輪(S81)	—	—
	41号墓	第76図	図版第46	石造標識	空風輪(S87)・火輪(S82)	—	—
	42号墓	第76図	図版第46・47	石造標識	水輪(S83)・地輪(S84)	B69	湯ノ灰桶釜
	43号墓	第76図	図版第46	石造標識	火輪(S88)・板碑(S79・89)	B71	山石
	44号墓	第76図	図版第46・47	石造標識	石仏(S91)	B72	—
E (第78図)	45号墓	第77図	図版第46・47	石造標識	火輪(S100)・水輪(S99)・ 地輪(S98)	B73	—
	46号墓	第77図	図版第47	石造標識	地輪(S102)	—	—
	47号墓	第77図	図版第47	石造標識	水輪(S97・101・103)	B74	—
	48号墓	第78図	図版第47	石造標識	空風輪(S95)・火輪(S95)・ 水輪(S97)・地輪(S94)	B76	—
	49号墓	第78図	図版第47	石造標識	—	B77	標識
	50号墓	第79図	図版第47	石造標識	火輪(S105)・水輪(S107)・ 地輪(S106)	B78・80	—
	51号墓	第79図	図版第47	石造標識	空風輪(S108)・火輪(S111)・ 水輪(S110)	B81・82	—
	52号墓	第80図	図版第50	石列	空風輪(S188・191・192・194)・ 水輪(S189)・地輪(S193)・ 板碑(S190・195)	B85・86・87	—
	53号墓	第81図	図版第52	方形区画	空風輪(S199)・火輪(S198)・ 石仏(S196・197)	B90・91	—
	54号墓	第82図	図版第54・55	方形区画	—	B93	—
F (第83図)	55号墓	第83図	図版第54・55	方形区画	—	B94	—
	56号墓	第84図	図版第53・54	方形区画	地輪(S206)	B96・97	—
	57号墓	第85図	図版第53・54	方形区画	地輪(S207)	B98	—
	58号墓	第86図	図版第56	石列	—	B99・100	三尊壺

第8表 坂ノ下中世墓群出土石造物・簪表

山名	郡別	河川番号	番号	流出地	種類	河川番号	番号	流出地	種類	河川番号	番号	流出地	種類	河川番号	番号
91	地盤	第109回	第70	556	地盤	第109回	第70	S109	地盤	第109回	第70	S103	水質	第116回	第74
92	地盤	第109回	第71	556	地盤	第109回	第70	S110	水質	第109回	第70	S104	水質	第113回	第73
93	地盤	第109回	第72	557	地盤	第109回	第70	S111	水質	第109回	第71	S105	水質	第109回	第75
94	地盤	第109回	第73	558	水質	第103回	第68	S112	水質	第109回	第71	S106	水質	第119回	第77
95	水質	第109回	第74	559	水質	第109回	第70	S113	水質	第109回	第72	S107	水質	第119回	第78
96	水質	第109回	第75	560	水質	第109回	第70	S114	水質	第109回	第73	S108	水質	第119回	第79
97	水質	第109回	第76	561	水質	第109回	第70	S115	水質	第109回	第74	S109	水質	第119回	第80
98	水質	第109回	第77	562	水質	第109回	第70	S116	水質	第109回	第75	S110	水質	第119回	第81
99	水質	第109回	第78	563	水質	第109回	第70	S117	水質	第109回	第76	S111	水質	第119回	第82
100	水質	第109回	第79	564	水質	第109回	第70	S118	水質	第109回	第77	S112	水質	第119回	第83
101	水質	第109回	第80	565	水質	第109回	第70	S119	水質	第109回	第78	S113	水質	第119回	第84
102	水質	第109回	第81	566	水質	第109回	第70	S120	水質	第109回	第79	S114	水質	第119回	第85
103	水質	第109回	第82	567	水質	第109回	第70	S121	水質	第109回	第80	S115	水質	第119回	第86
104	水質	第109回	第83	568	水質	第109回	第70	S122	水質	第109回	第81	S116	水質	第119回	第87
105	水質	第109回	第84	569	水質	第109回	第70	S123	水質	第109回	第82	S117	水質	第119回	第88
106	水質	第109回	第85	570	水質	第109回	第70	S124	水質	第109回	第83	S118	水質	第119回	第89
107	水質	第109回	第86	571	水質	第109回	第70	S125	水質	第109回	第84	S119	水質	第119回	第90
108	水質	第109回	第87	572	水質	第109回	第70	S126	水質	第109回	第85	S120	水質	第119回	第91
109	水質	第109回	第88	573	水質	第109回	第70	S127	水質	第109回	第86	S121	水質	第119回	第92
110	水質	第109回	第89	574	水質	第109回	第70	S128	水質	第109回	第87	S122	水質	第119回	第93
111	水質	第109回	第90	575	水質	第109回	第70	S129	水質	第109回	第88	S123	水質	第119回	第94
112	水質	第109回	第91	576	水質	第109回	第70	S130	水質	第109回	第89	S124	水質	第119回	第95
113	水質	第109回	第92	577	水質	第109回	第70	S131	水質	第109回	第90	S125	水質	第119回	第96
114	水質	第109回	第93	578	水質	第109回	第70	S132	水質	第109回	第91	S126	水質	第119回	第97
115	水質	第109回	第94	579	水質	第109回	第70	S133	水質	第109回	第92	S127	水質	第119回	第98
116	水質	第109回	第95	580	水質	第109回	第70	S134	水質	第109回	第93	S128	水質	第119回	第99
117	水質	第109回	第96	581	水質	第109回	第70	S135	水質	第109回	第94	S129	水質	第119回	第100
118	水質	第109回	第97	582	水質	第109回	第70	S136	水質	第109回	第95	S130	水質	第119回	第101
119	水質	第109回	第98	583	水質	第109回	第70	S137	水質	第109回	第96	S131	水質	第119回	第102

註7 石造物の種類の項目にトーンがかかっているものは第125・126編に原本を提示したものである。

第9表 坂ノ下中世墓群骨片出土一覧表

	地点番号	出土地点名	重量(g)	移動の可能性
A	B1	2号墓地輪(S3)下層	300.0	×
	B2	3号墓地輪(S4)下層	400.0	×
	B3	4号墓地輪内	740.0	×
	B4	4.5号墓石列下層	4.5	△
	B5	5号墓納骨坑内	240.0	×
	B6	5号墓区画内	3.5	○
	B7	5号墓区画内下層	18.0	×
	B8	6号墓区画内	138.0	×
	B9	7号墓区画内	28.0	×
	B10	9号墓区画南部	240.0	×
	B11	9号墓地輪(S13)下層	2.2	×
	B12	9号墓区画内北部(1)	310.0	×
	B13	9号墓区画内北部(2)	110.0	×
	B14	9号墓地輪(S19)下層	300.0	×
	B15	8号墓北方(1)	4.4	○
	B16	8号墓北方(2)	5.5	△
	B17	8号墓北方(3)	67.5	×
	B18	9号墓東方(1)	57.5	×
	B19	9号墓東方(2)	670.0	×
B	B20	9号墓北方	300.0	×
	B21	11号墓区画内	260.0	×
	B22	10号墓区画内	17.5	△
	B23	10号墓西側	37.5	○
	B24	13号墓墓石間	140.0	△
	B25	15号墓石列間	37.5	○
	B26	16号墓区画内	210.0	×
	B27	19号墓区画内	87.5	×
	B28	20号墓区画内	37.5	×
	B29	21号墓墓骨南側	17.5	×
	B30	21号墓墓骨西側	440.0	×
	B31	21号墓墓骨北側	7.4	○
	B32	22号墓区画内	120.0	×
	B33	23号墓区画内南部	280.0	×
	B34	23号墓地輪(S47)下層	600.0	×
	B35	24号墓地輪(S48)下層	300.0	×
	B36	24号墓大妻内	77.5	×
	B37	24号墓区画内北部	160.0	×
	B38	25号墓石仏(S50)前面下層	100.0	×
C	B39	25号墓地輪(S57)下層	2.6	×
	B40	25号墓地輪(S60)下層	200.0	×
	B41	26号墓墓骨内	1340.0	×
	B42	26号墓区画内(1)	440.0	×
	B43	26号墓区画内(2)	170.0	×
	B44	26号墓区画内(3)	420.0	×
	B45	26号墓区画内(4)	160.0	×
	B46	26号墓区画内(5)	17.5	×
	B47	26号墓区画内(6)	460.0	×
	B48	26号墓石列間	2580.0	×
	B49	27号墓地輪(S118)下層	190.0	×
	B50	28号墓石仏(S119)背面下層	380.0	×
D	B51	29号墓石仏(S120)前面下層	87.5	×
	B52	30号墓石仏(S121)下層	67.5	×
	B53	30号墓石仏(S121)北側	280.0	×
	B54	31号墓地輪(S144)下層	660.0	×
	B55	31号墓地輪(S144)東側	57.5	×
	B56	32号墓地輪(S147)下層	450.0	×
	B57	32号墓地輪(S147)東側	110.0	×
	B58	33号墓区画内右仏(S152)下層	210.0	×
	B59	33号墓区画内右列下層	820.0	×
	B60	33号墓区画 北側	17.5	○
	B61	33号墓方板碑(S156)下層	1.9	○
	B62	34号墓地輪(S158)下層	140.0	×
	B63	35号墓墓骨内	630.0	×
	B64	36号墓地輪(S160)下層	130.0	×
	B65	37号墓地輪(S161)下層	120.0	×
	B66	38号墓墓骨内	850.0	×
	B67	38号墓墓骨西側	200.0	○
	B68	39号墓方板碑(S163, 164)前面下層	300.0	×
	B69	42号墓墓骨内	140.0	×
E	B70	42号墓地輪(S86)西側	6.4	○
	B71	43号墓地輪(S90)下層	2.6	×
	B72	44号墓石仏(S91)下層	2.0	×
	B73	45号墓地輪(S98)下層	2.8	×
	B74	47号墓地輪(S104)下層	1.5	×
	B75	47号墓北方空風輪(S112)下層	1.5	○
	B76	48号墓地輪(S94)下層	27.5	×
	B77	49号墓墓骨内	10.0	×
	B78	50号墓地輪(S106)下層	37.5	×
	B79	50号地輪(S106)東側	6.7	×
	B80	50号墓西側火輪(S105)下層	300.0	×
	B81	51号墓地輪(S109)下層	57.5	×
	B82	51号墓北側水輪(S110)下層	5.4	△
	B83	58号墓南方板碑(S180)周辺・柁	9.2	○
	B84	34号墓東方地輪(S169)下層	2.8	×
	B85	52号墓水輪(S189)下層	490.0	×
	B86	52号墓石列列間一拵	240.0	○
	B87	52号墓地輪(S193)下層	17.5	×
	B88	53号墓東方周辺一拵	240.0	○
	B89	52号墓北方	2.3	○
	B90	53号墓区画内南部	230.0	×
	B91	53号墓区画内北部	27.5	×
	B92	53号墓北方	37.5	△
	B93	54号墓区画内	4.4	△
	B94	55号墓区画内	780.0	×
	B95	56号墓東方石仏(S203)下層	2.9	○
	B96	56号墓地輪(S206)下層	430.0	×
	B97	56号墓地輪(S206)南側	470.0	×
	B98	57号墓地輪(S207)下層	120.0	×
	B99	58号墓墓骨内	460.0	×
	B100	58号墓墓骨北側	280.0	×

最後にD群を主に構成する石造標識墓である。石で区画したり、石を集めたりせず、基本的には原位置を保つと思われる石造物のみで構成される中世墓について呼称する。

以上、ここでは中世墓の形態として、方形区画墓・石造標識墓の2タイプに分類したが、それら

すべてに骨片が伴うものではなく、伴っても数グラムの場合もあって、確実に墓と断定できないものもある。また逆に、地表になんら石造物等の標識を伴わないで、地中より突然のように骨片が出土する例もある。ここでは出土する骨片の多少にかかわらず、ほぼ原形や原位置を保つ方形区画や集石、五輪塔・石仏などの石造物そのものや、逆にそれらが伴わないで骨片がまとまって地中より出土したものを、本報告では「中世墓」として呼称しておきたい。

ちなみにこれら3つの用語は本遺跡中世墓の事実記載を誤解なく行うため、便宜的に使用するもので、その意義などについての検討は行っていない。以下、これらの用語を用いて個々の中世墓について説明する。

第4節 中世墓A群

A群は調査区の南東部を占め、方形区画を呈する13基を数える。本群は明神山15号墳東側の周溝を人為的に埋めて造成した平坦地を中心に展開する。本群は区画する石の連接・造営方向より、2～9号墓と10～13号墓の2小群に分けることができる（第45図、図版第二十六・二十七・二十八）。なお、1号墓は2～13号墓までの12基とはやや離れて1基だけで存在し、A群のほかの墓と直接関連するとは考えられないが、造営方向が2・3号墓と近似しA群に最も近いために、ここでは便宜上本群に含めて説明する。

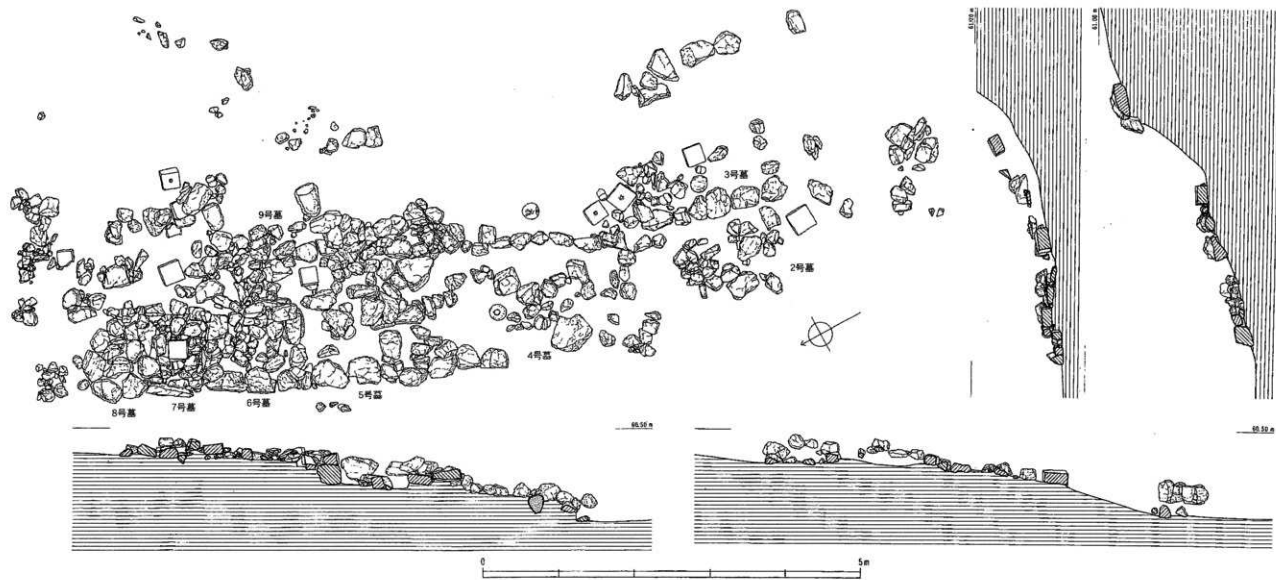
2～9号墓のうち4～8号墓はA群中央部に位置し、南北に4基が連接する。さらに5～7号墓に東接して9号墓が存在する。連接する4～9号墓の5基は造営の方向を同じくし、本群の大きな特徴となっている。A群南部、4号墓南方には2・3号墓が東西に並んで存在する。4～9号墓より石列が続くが、造営方向はやや西に傾く。なお9号墓の東側で石造物や石が集まるが、石の配置に規則性がない。また石造物も上から転落したものと考えられることから、これらの石も上方などの他から転落したものと考えられ、ここでは中世墓としては扱わないこととする。

10～13号墓はA群北部に位置する。10号墓と11号墓は連接するが、12号墓と13号墓は近接するものの連接はしない。これら4基は4～9号墓より墓の中軸を西へ傾け、C群の23～25号墓と近いことが注目される。なお10～13号墓は特に遺存状況が悪い。これは前述したように4～8号遺構が北へ位置するに当たって標高が高くなることを考えると、10～13号墓は上面より擾乱を大きく受けたと想定できる。

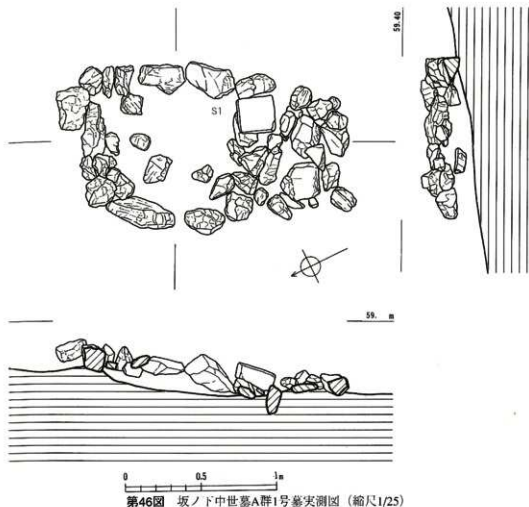
A群北部・12号墓の西方では径1m弱の巨石が70cmの間隔をあけて2個東西に並ぶ。方形区画に使用されている石質と同じであるが、加工の痕跡は見られない。

出土した石造物は空風輪7基、空風火輪1基、火輪2基、水輪2基、地輪10基、石仏3基である。そのうち石仏3基はともに上方よりの転落と思われる。板碑は1基も存在しない。確実にA群に伴うと思われる石仏・板碑が1基も存在せず、五輪塔のみであることが本群の石造物の大きな特徴となっている。原位置、またはそれに近いと考えられる石造物は、地輪5基（S3・S4・S13・S19・S20）である。

骨片の出土は範囲が明確でないものや、本来は方形区画に伴ったと思われるが骨片のみ存在す



第45図 坂ノ下中世縄文A群（方形区画部分）全体図（縮尺1/50）

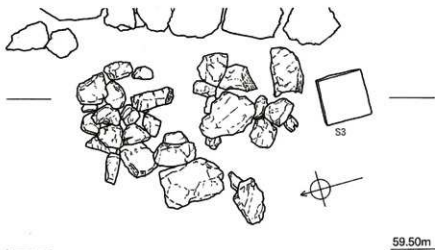


第46図 坂ノ下中世墓A群1号墓実測図(縮尺1/25)

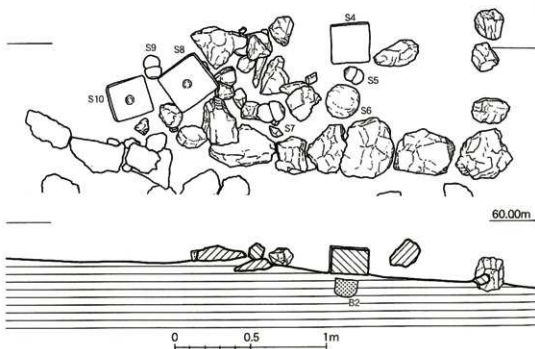
るものなども含めて24ヶ所を数える。また、1号墓や13号墓のように骨片を伴わない方形区画の例もある。骨片の出土状態は、4号墓では四耳壺に、5号墓では石囲みの納骨坑にそれぞれ納めているが、その他は土中より直接出土している。なお7号墓については上面を径5cm前後の石が囲い、その下から円筒形状に骨片が出土していることから、有機質容器(曲物など)の存在が想定される。

1号墓(第46図、図版第三一①)

1号墓は2～13号墓までの12基よりやや離れたA群西南部に、1基だけ独立して存在する。10～30cm前後の山石で方形に区画し、内部に石を充填しない。南北長1.27m、東西長1.1mを測る。南辺に接して10～20cm前後の山石が80cm四方に広がっているが、これらの石が当初よりこの位置に存在したのか、もしくは区画内に充填されていたものかは不明である。また、南辺右列上に地輪1基(S1)が存在するが、本遺構に伴うものかは不明である。区画の石は標高58.78mから69.30mの間に位直する。区画内、もしくは近接して骨片は出土していない。



第47図 坂ノ下中世墓A群2号墓実測図 (縮尺1/25)



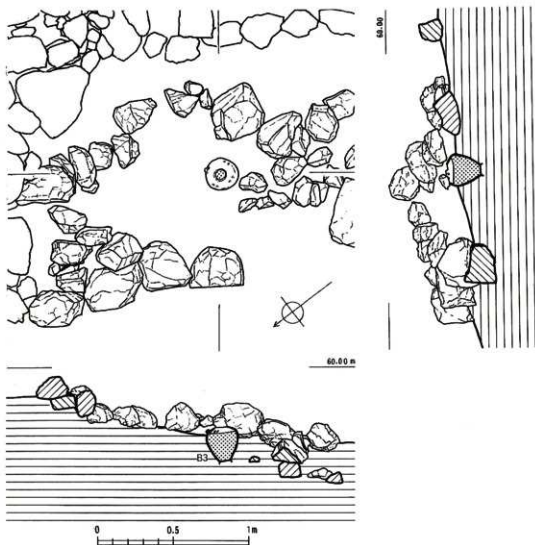
第48図 坂ノ下中世墓A群3号墓実測図 (縮尺1/25)

2号墓 (第47図、図版第三-②)

2号墓はA群南端に位置し、3号墓に西接する。南端に地輪1基 (S3) があり、その北側に10数個の石が集中する。石の配置に規則性がなく、方形区画をなしていたか否かは不明である。先に述べた地輪のほかに石造物は存在しない。地輪は標高59.35mから59.60mの間に位置する。地輪の下から23cm四方、厚さ13cmの範囲で骨片が出上している (B1)。

3号墓 (第48図、図版第三-②)

3号墓はA群南端に位置し、2号墓に東接する。「コ」の字状に石が並び、東辺を欠く方形区画を呈する。東側は調査区外上方へ続く斜面となり、当初より区画する石がなかったと考えられる。西辺は30cm前後の石6個を並べ、長さ2mを測る。北辺と南辺は西辺端よりの石を数個ずつ並べ、それぞれの長さは88cmと75cmを測る。区画の石は標高59.50mから59.85mの間に位置する。



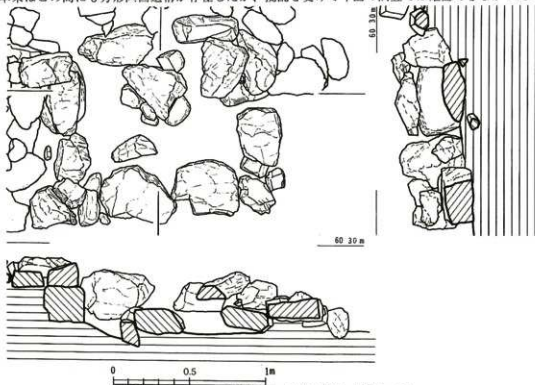
第49図 坂ノ下中世墓A群4号墓実測図 (縮尺1/25)

区画中央に地輪1基 (S4) が標高59.83mから60.05mの間に位置する。その他の石造物は区画内に空風輪2基 (S5・S7) と水輪1基 (S6) が存在するが、本遺構に伴うものか否かは不明である。地輪の下より18cm四方、厚さ13cmの範囲で骨片が出上している。骨片の総量は400gを量る (B2)。なお、区画北辺外に地輪2基 (S8・S10) が並ぶが、骨片等を伴わない。また本遺構の北側で南北方向に石が1列に並ぶ。本来、この石列は方形区画の西辺をなし、前述の地輪2基もこの区画に伴うものではなかったかと考えられる。

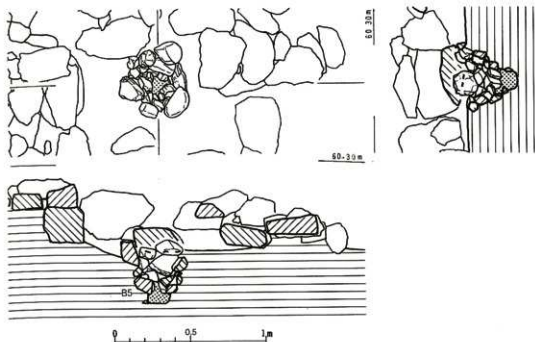
4号墓 (第49図、図版第三二①)

4号墓はA群中央部の南よりに位置する。本遺構はA群の他の遺構のように明確な方形区画を呈さず、南側は石が集中するのみで、北側にのみ規則的に石が並ぶ。西辺は30～40cm前後の石が4個並び、その長さ1.5mを測る。北辺は25cm前後の石が6個並び、その長さ90cmを測る。東辺は20～30cm前後の石が8個「」状に並び、その長さは1.3mを測る。東西両辺とも南へ延びるにしたがって、石の配置が乱れるか、存在しなくなって、区画が不明になる。区画内部を石で充填しない。区画の石で原位置と考えられるものは標高59.95mから59.30mの間に位置する。区画内やその周囲に石造物は1基も存在しない。

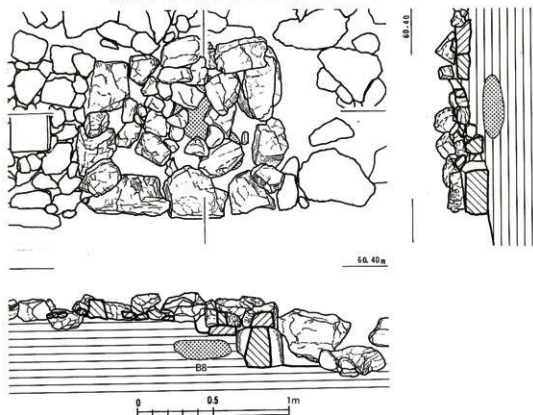
区画中央で四耳壺1個 (第87図5、図版第五十九③) が、標高59.35mから59.60mの間に位置する。四耳壺内より骨片が出土している。骨片の総量は740gを量る。(B3)。ところで本遺構と2号墓は5mの間隔を置き、その中間には多くの石が雑然と存在する。よって骨片等こそ見られないものの、本来はこの間にも方形区画遺構が存在したが、攪乱を受けて今回の調査では確認できなかったの



第50図 坂ノ下中世墓A群5号墓実測図 (縮尺1/25)



第51図 坂ノ下中世墓A群5号墓納骨坑実測図（縮尺1/25）



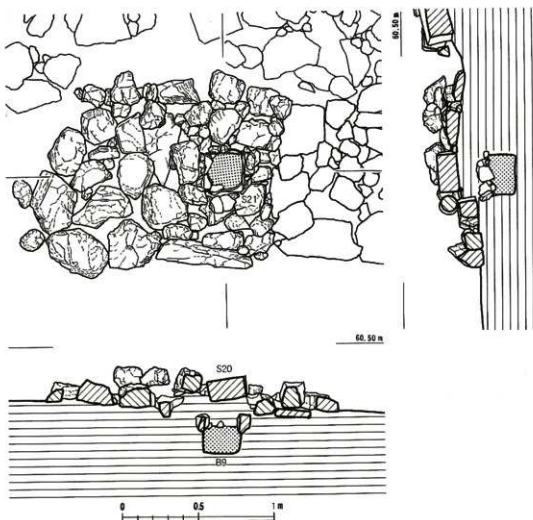
第52図 坂ノ下中世墓A群6号墓実測図（縮尺1/25）

ではないのかも考えられる。

5号墓（第50図、図版第三二②）

5号墓はA群のほぼ中央部に位置し、4号墓に北接し、6号墓に南接する。北辺は6号墓の南辺を利用する。東・西・南の3辺は30～40cmの石を用いて、それぞれ1.1m、1.25m、1.23mを測り、方形区画を呈する。区画内を石で充填しない。区画の石は標高59.72mから60.13mの間に位置する。本遺構に伴うと思われる石造物は周辺にも存在しない。

区画内中央に石組みの納骨坑が存在する（第51図、図版第三三②）。坑の上面は区画の石の底面とはほぼ同じ標高に位置する。坑の断面形は上部が逆円錐形、下部が円筒形を呈する。上面から円筒部の上端まで5cm前後の石を坑の壁に張り付けるようにして、小型の石室のような形体を呈する。大きく開いた上面は45cm×33cmの略四面体の石を用いて蓋としている。坑の上面は標高59.80cm、底面は59.37mに位置する。坑内より骨片が出土している。骨片の総量は240gを量る（B5）。



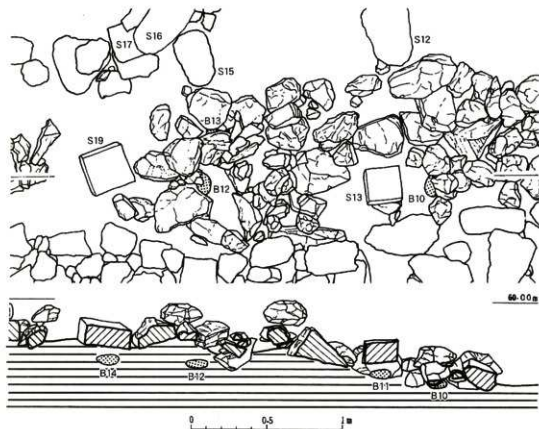
第53図 坂ノド中世墓A群7・8号墓実測図（縮尺1/25）

6号墓 (第52図、図版第三②)

6号墓はA群中央部に位置する。5号墓に北接し、7号墓に南接する。おもに30～40cmの石を用いて、方形区画を呈する。南北長1.35m、東西長1.13mを測る。区画内に10～20cmの石を充填する。区画の石は標高59.7mから60.25mの間に位置する。A群中で方形区画墓の典型例である。本墓に伴うと思われる石造物は存在しない。区画内中央の南より、38cm×43cm、厚さ13cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は138gを量る (B8)。

7号墓 (第53図、図版第三③)

7号墓はA群北部に位置する。6号墓に北接し、8号墓に南接する。南辺は6号墓の北辺を利用する。北・東・西の三辺を30～70cmの石を用いて、方形区画を呈する。南北長0.88m、東西長1.3mを測る。区画内に10cm前後の石を充填する。区画の石は標高60.05mから60.30mの間に位置する。区画内中央に地輪1基 (S20) が、ほぼ原位位と思われる状態にある。他に石造物は地輪の西側に空風輪1基 (S21) があるが、本遺構に伴うか否かは不明である。地輪の下、約15cmに納骨坑が存在する。坑は円筒形を呈し、上面径25cm、底面径23cm、深さ20cmを測る。上縁には5cm前後の石数個を廻らす。容器と思われるものは確認できなかったが、断面より曲物等の有機質納骨容器の存在が考えられる。坑内より骨片が出土している。骨片の総量は28gを量る (B9)。



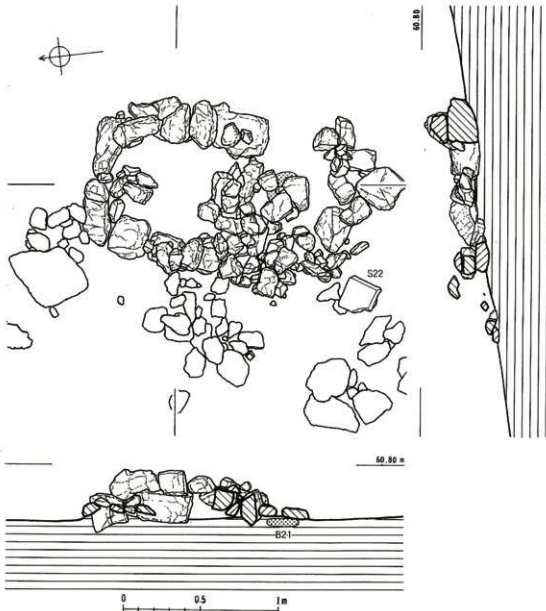
第54図 坂ノ下中世墓A群9号墓実測図 (縮尺1/25)

8号墓 (第53図、図版第三①)

8号墓はA群北部、連続する方形区画遺構群の北端に位置する。7号遺構の北辺に接し、南北長75cm、東西長125cmの範囲に、40cm前後の石を集めたような状態で検出された。石は標高60.12mから60.35mの間に位置する。本遺構に伴うと思われる石造物はなく、骨片も出土していない。

9号墓 (第54図、図版第三②)

9号墓はA群中央部に位置し、5・6号墓に東接する。本遺構はA群のほかの遺構のように南北に明確な区画を呈さない。西辺は5・8号墓の東辺を利用し、東辺は長さ1.7mほどの長さに石が並ぶ。



第55図 坂ノ下中世墓A群10・11号墓実測図 (縮尺1/25)

ここでは5・6号墓の東辺とこの石列の間のものをまとめて9号墓とする。本遺構を構成すると思われる石は、標高59.42mから59.88mの間に位置する。北と南にそれぞれ地輪が1基ずつあり（S13、S19）、ほぼ原位置に近いと考えられる。2基の地輪の間に石が部分的に集中し、この部分を境として北に位置する地輪周辺の石が、南に位置する地輪周辺の石よりも20cm前後高い位置にある。つまり平面では明確にできなかったが、9号墓は2基の別の墓になる可能性が高い。石造物は前述の地輪2基のほかは、本遺構に伴うと思われるものはない。なお東辺石列の脇では、上方からの転落と思われる石仏2基（S12、S15）が出土している。南の地輪（S13）は標高59.60mから59.77mの間に位置する。地輪の下より15cm四方、厚さ6cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は10gを量る（B11）。この地輪から南へ20cmほど離れ、14cm四方、厚さ6cmの範囲でも骨片が出土し、総量は240gを量る（B10）。

北の地輪（S19）は標高59.67mから59.88mの間に位置する。地輪の下より16cm四方、厚さ6cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は300gを量る（B14）。この地輪から南へ50cmほど離れ、18cm四方、厚さ10cmの範囲でも骨片が出土している。骨片は310gを量る（B12）。さらにこれより東へ20cmほど離れ、14cm四方、厚さ5cmの範囲でも骨片が出土し、総量は110gを量る（B13）。

10号墓（第55図、図版第三五②）

10号墓はA群北部に位置し、11号墓に北接する。20cm前後の山石が方形に並び、方形区画を呈する。南北長1.14m、東西長1.12mを測る。区画内に石を充填しない。区画の石は標高60.36mから60.76mの間に位置する。本遺構の周囲に石造物は存在せず、山石が多数存在する。これらの石が本遺構に伴うか否かは不明である。区画内より骨片が散在して出土している。骨片の総量は17.5gを量る（B22）。

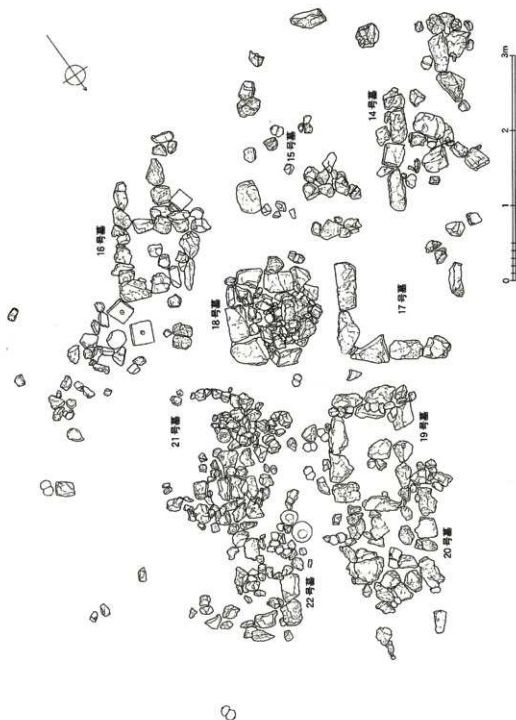
11号墓（第55図、図版第三五②）

11号墓は10号墓の南辺に接して、逆L字状に石列が並ぶ。西辺0.75m、南辺1.05mを測る。区画の石は標高60.34mから60.72mの間に位置する。西側に空風火輪1基（S22）が存在するが、本遺構に伴うか否かは不明である。区画中央に20cm四方、厚さ6cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は260gを量る（B21）。

なお、12号墓は「コ」の字状に石列が並ぶのみであり、骨片は出土していない。また13号墓は集められた石の間より骨片140g（B24）が散在して出土しているのみである。ゆえにこの2基については中世墓としては明確な遺構と判断できなかったので詳細な記述を省く。

A群の造営は6号墓から北へ8号墓の順に、6号墓から南へ5号墓の順に考えられる。

最後となったが、A群では10・11号墓の西、9号墓の北側延長に区画も石造物に伴わなく、土中から人骨がまとまって出土している。8・9号墓からはやや離れるが、その延長で3ヶ所（B15・B16・B17）が並ぶ。南側の2ヶ所（B15・16）は骨片の量も少ないが、北側は（B17）は67.5gを量る。A・C・D群のちょうど中間に位置し、規格性がない集石部分でも140gの骨片が出土している（B24）。さらに9号墓の東、10・11号墓の南でも3ヶ所（B18・B19・B20）でまとまって出土し、南（B18）が57.5g、中央（B19）が670g、北（B20）が300gを量る。これらの骨片すべてが別地点から流出したものとは考えられない。A群でも10・11号墓が2～9号墓の検出面よりも若干高いことから、

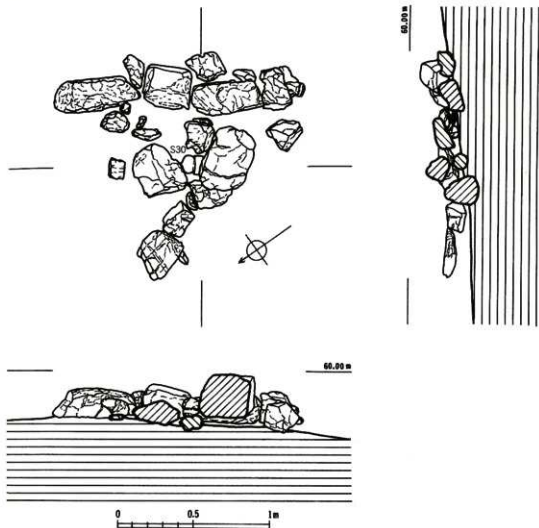


第56図 坂ノ下中世墓B群全体図 (縮尺1/50)

これらの骨片の上には本来は区画などの施設があったものが、流失、または再整理されたあとに残されていたものである可能性も高いと考えられる。

第5節 中世墓B群

B群は調査区の南西部を占め、方形区画の形態を呈する中世墓9基を数える。本群は明神山15号墳の墳頂部を中心にして展開する（第56図、図版第三十六①）。標高は高いもので22号墓が60.05mから60.30mの間に、低いもので14号墓が59.55mから59.90mの間に位置する。これは22号墓が古墳の墳頂部中央に、14号墓がより墳丘裾に近い位置に造営されているためである。以上のように、B群は本来の古墳の墳頂平坦面に大きく手を加えることなく、造営されたと考えられる。14・15号墓の2基は、明確な方形区画を呈さず、骨片もほとんど出土しなかった。石が列になって並んでい

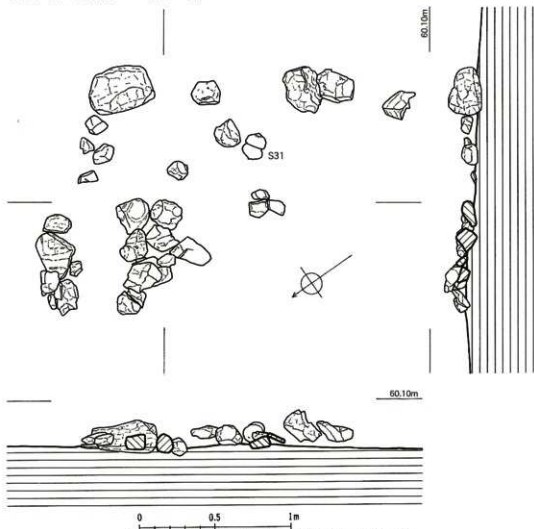


第57図 板ノ下中世墓B群14号墓実測図（縮尺1/25）

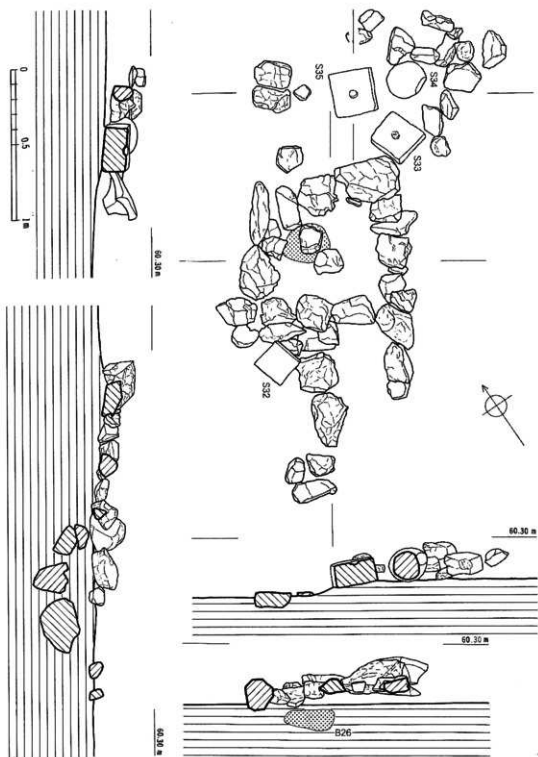
ることなどから、本来は方形区画を呈する形体の中世墓であったのであろう。また17号墓のように骨片の出土をみない方形区画もあるが、ここでは一応、中世墓として扱う。本群と同じく方形区画墓で構成されるA・C両群との大きな違いは、方形区画が接続しないで各々独立して造営されていることである。19号墓と20号墓、21号墓と22号墓のように、一部が重複するように接続するものもあるが、A群とC群の接続と明らかに異なる。石造物は空風輪2基、火輪2基、水輪3基、地輪1基が出土しており、板碑・石仏は1基も出土していない。原位置を保っていると考えられる石造物はないが、16号墓北側で火輪・水輪・地輪がそれぞれ1基ずつ出土しており、本来はこれら3基が組み合わせり一対の組み合わせの五輪塔であったのであろう。

骨片は21号墓が蔵骨器に納骨するのみで、ほかは土中より直接出土した。また14・17・18号墓では前述したように、骨片はまったく出土していない。

以下、個々の遺構について述べる。



第58図 坂ノ下中世墓B群15号墓実測図(縮尺1/25)



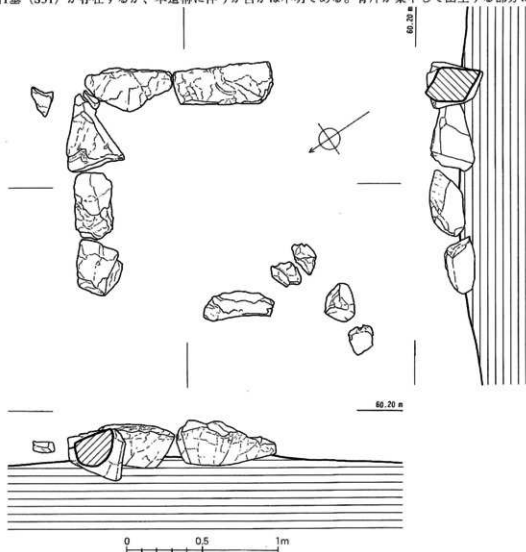
第59図 坂ノ下中世墓B群16号墓実測図（縮尺1/25）

14号墓（第57図、図版第三六②）

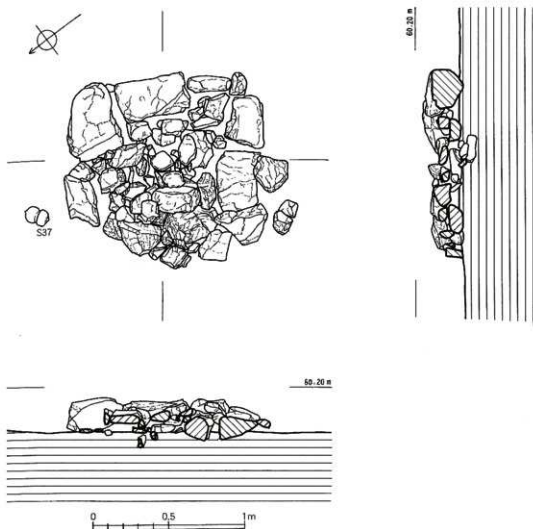
14号墓はB群南西部に位置する。17号墓に南接し、15号墓に西接する。50cm×20cm前後を主体とした長方体の山石が5個南北方向に並び、その長さ1.65mを測る。この右列が方形区画の一边をなしていたと思われる。区画の石は標高59.55mから59.90mの間に位置する。右列の西辺には山石数個と空風輪1基（S30）が点在するが、本遺構に伴うか否かは不明である。骨片は出土していない。

15号墓（第58図、図版第三六②）

15号墓はB群南部に位置し、14号墓に東接する。人為的に配置されたと考えられる石列が3列見られるが、当初の区画は確定できない。区画の石は標高59.72mから59.90mの間に位置する。空風輪1基（S31）が存在するが、本遺構に伴うか否かは不明である。骨片が集中して出土する部分は



第60図 坂ノ下中世墓B群17号墓実測図（縮尺1/25）

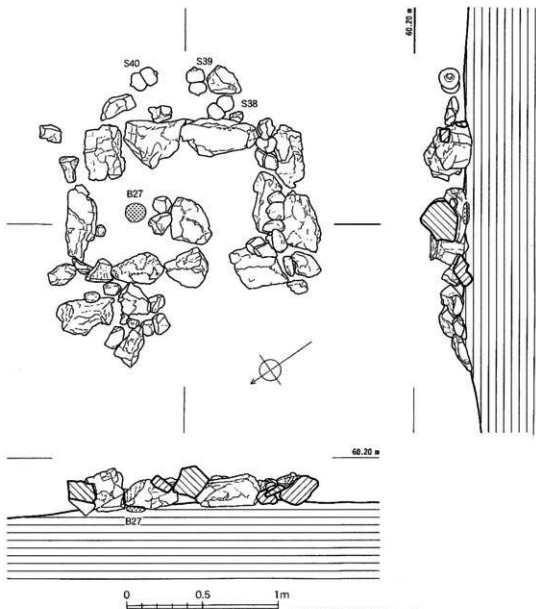


第61図 坂ノ下中世墓B群18号墓実測図（縮尺1/25）

ないが、石の間などで点在して出土している。それらを集めた骨片の総量は37.5gを量る。(B25)。

16号墓（第59図、図版第三七①）

16号墓はB群東南部に位置し、15・18号墓に東接する。30cm×40cm前後から20cm前後の大きさの山石で方形に区画し、南北長1.1m、東西長1.25mを測る。その内側には2個の山石を配すのみである。区画する石は標高59.90mから60.20mの間に位置する。方形区画の南辺中央より、標高59.50mから59.87mの間で、南に山石が4個並ぶ。この石列が本来、本遺構に伴うものと思われる。北側には火輪（S33）、水輪（S34）、地輪（S35）の3基があり、対になって本遺構に伴うものと思われる。この組合五輪塔が、方形区画内か外のどちらに置かれていたかは不明である。ちなみに、地輪の底面は標高59.97mに位置する。さらに方形区画の南側に別の火輪1基（S32）があるが、本遺構に伴うものか否かは不明である。骨片は区画内北西よりの位置、標高59.82mを検出面とし、30cm×25cm、厚さ13cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は210gを量る（B26）。



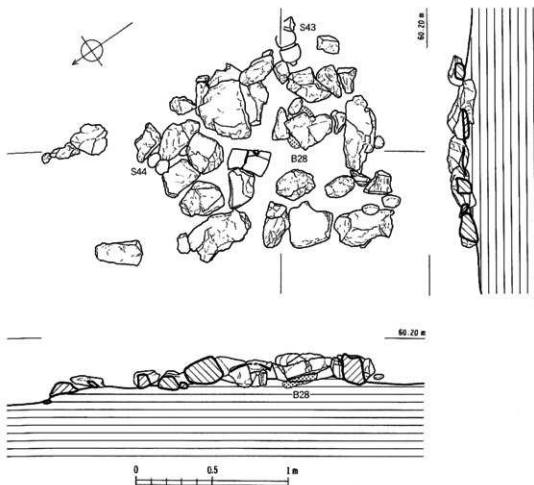
第62図 坂ノ下中世墓B群19号墓実測図（縮尺1/25）

17号墓（第60図、図版第三七②）

17号墓はB群西部に位置し、14号墓に北接する。50cm×20cm前後の長方体を呈する山石5個がL字状に並び、南北長1.4m、東西長1.5mを測る。このL字状石列が方形区画の東辺と北辺をなしていると考えられる。区画の4角は標高59.70mから60.12mの間に位置する。東南方向には山石が5個点存在するが、本遺構に伴うか否かは不明である。骨片は出土していない。

18号墓（第61図、図版第三八①）

18号墓はB群中央部に位置し、15号墓に北接する。40cm前後の山石で方形に区画し、南北長1.3m、



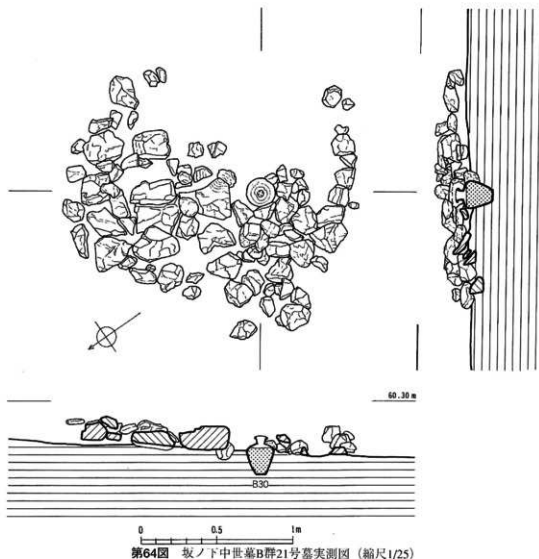
第63図 坂ノ下中世墓B群20号墓実測図（縮尺1/25）

東西長1.2mを測る。方形区画の西辺と南辺の一部は崩れたものと思われる。区画内に10cm前後の石を充填する。区画する石は標高59.82mから60.15mの間に位置する。北辺の脇に空風輪1基（S37）があるが、木造構に伴うか否かは不明である。B群中でも最も残りの良い方形区画墓と考えられたが、区画内部を切断の治果、骨片是一片も出土していない。

19号墓（第62図、図版第三八②）

19号墓はB群西部に位置する。17号墓に北接し、20号墓が隅を重ねるように北西部で接する。50cm×20cm前後の長方体を呈する山石を巡らし、方形区画を築する。南北長1.6m、東西長1.13mを測る。区画内には山石3個が点在し、石を充填しない。区画する石は標高59.82mから60.15mの間に位置する。周囲には空風輪3基（S38、S39、S40）と小さな山石が数個点在するが、いずれも木造構に伴うか否かは不明である。区画内の北部、標高59.85mを検出面とし、12cm四方、厚さ8cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は37.5gを量る（B27）。

20号墓（第63図、図版第三八②）

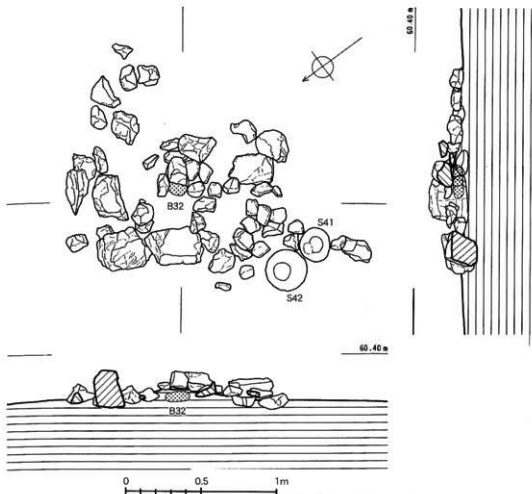


20号墓はB群北西部に位置する。22号墓に西接し、東南隅を19号墓に重ねるように接する。40cm×20cm前後の長方体を呈する山石を巡らせ、方形区画を呈する。南北長1.53m、東西長1.25mを測る。その内側には区画する石より小さめの石が数個点在し、石を充填しない。区画する石は標高59.87mから60.12mの間に位置する。北側と東側には空風輪が1基ずつ（S43、S44）があるが、本遺構に伴うか否かは不明である。

区画内南東部、標高59.95mを検出面とし、25cm×20cm、厚さ5cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は37.5gを量る（B28）。なお方形区画内の北西で大甕の破片が出土しているが、これには骨片等は伴わない。

21号墓（第64図、図版第三九①）

21号墓はB群東側に位置する。19号墓に東接し、18号墓に北接する。北西隅を22号墓に重ねるよ

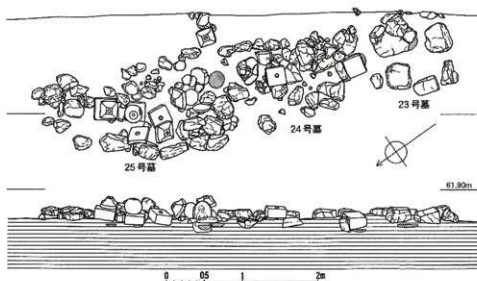


第65図 坂ノ下中世墓B群22号墓実測図（縮尺1/25）

うに接する。南辺と北辺がやや弧状にふくむ方形区画を呈するが、東辺には区画する石が当初より存在しなかったのか残っていない。南北長1.7m、東西長1.25mを測かる。区画する石は標高59.92mから60.20mの間に位置する。付近に石造物は存在しない。方形区画中央部の南よりで口縁を一部欠く略完形の甕を検出している（図版第三九②）。甕の口縁は60.05m、底面は59.82mに位置する。口縁は方形区画の石の上面より15cmほど下に位置し、甕の有部より上を石に囲まれた状態で置かれている（図版第三九②）。骨片が甕の肩部付近まで入れられている。骨片の総量は440gを量る（B30）。

22号墓（第65図、図版第三九①）

22号墓はB群北東部に位置し、20号墓に東接する。東南隅を21号墓に重なるように接する。東辺には区画する石が当初より存在しなかったのか残っていない。南北長13.0m、東西長13.8mを測る。方形区画の石は標高60.05mから60.30mの間に位置する。南西隅に水輪2基（S41、S42）があるが本遺構に伴うか否かは不明である。区画中央部で石が数個集中した部分の下、標高60.10mを検出面



第66図 坂ノ下中世墓C群全体図（縮尺1/50）

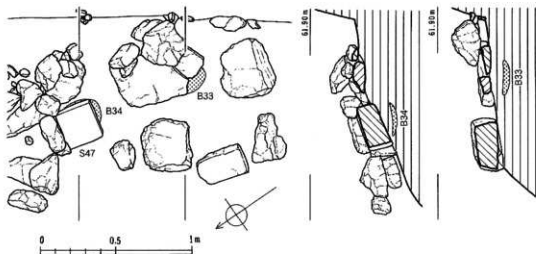
として、23cm×15cm、厚さ8cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は120gを量る（B32）。

なお、本群の方形区画墓は基本的に接続しないために、19号墓が20号墓より先に、21号墓が22号墓より先に造営されていると判断されるほか以外の、先後関係は不明である。

第6節 中世墓C群

C群はA群の東側、D群26号墓の南側に位置し、A群より1mから1.5mほど高い段の平坦面の縁に沿ってほぼ南北方向へ3基が並ぶ（第66図、図版第四〇①）。

基本的には方形区画の形状を呈し、その内側に石造物などが存在している。3基とも区画を接続して造営する。しかし、方形区画を構成する石はA群のように密に隣接して石を組むような配し方



第67図 坂ノ下中世墓C群23号墓実測図（縮尺1/25）

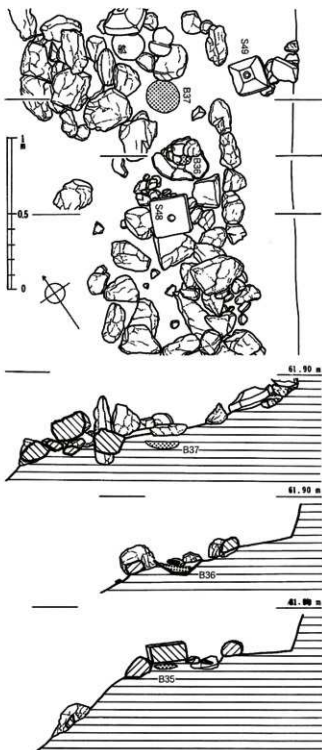
よりも、間隔をわずかにあけて石を列状に並べたような配し方である。

造営は、まず25号墓、そして25号墓の東辺を利用するようにして24号墓、さらに24号墓の南辺に接して23号墓の順に行われたと考えられる。本群は東側が調査区外となるため、さらに連続するかなど他の遺構は確認できなかった。しかしテラスの縁辺が東側へ弧をえがくようにして調査区外へ続くこと、A群でもC群の方向より転落したと考えられる石造物が数個あることなどから、ほかにも中世墓が存在する可能性は高い。またさらに東側には現在のお堂がある宝珠寺へ行く参道脇に石仏などを確認することができるのは、この参道を造るさいに出土したものと考えれば、C群が広がる方向に合致することからも、この推定は正しいものと言えよう。

石造物は空風輪1基、火輪5基、水輪2基、地輪5基、石仏1基の計14基を数え、ほとんどが原位置、もしくは原位置に近い状態で出土していると考えられる。また本群の上層50cmほどのところで火山礫凝灰岩製の板碑の破片2片(S62・S63)が出土している。

骨片の出土は8ヶ所を数え、移動したと考えられるものはない。大甕の底部内より出土した骨片以外は直接土中より出土している。また25号墓の地輪(S55)の下から20cmほどの短刀が出土し、本遺跡の中世墓群全58基中で唯一副葬品として確認されたものである。

以下、3基の方形区面墓について説



第68図 坂ノド中世墓C群24号墓実測図(縮尺1/25)

明する。

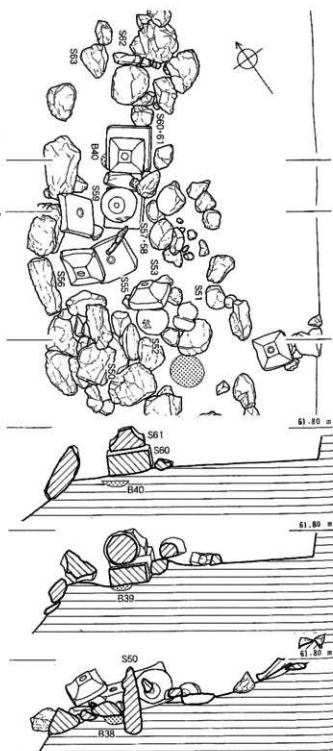
23号墓 (第67図、図版第四
②)

23号墓はC群南部に位置する。24号墓の南に連接して造営され、北側の区画は明確ではない。南側は3個の山石が隅を形成し、このことから南北長約1.9m、東西長1.1mの長方形を呈すると考えられる。区画と考えられる石は標高61.30mから61.63mの間に位置する。

区画内南部の標高61.52mから61.63mの間に、35cm×55cmを測る、扁平な山石がある。この山石の下より25cm四方、厚さ5cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は280gを量る (B33)。区画内北部に地輪1基 (S47) が横高61.35mから61.60mの間に位置する。地輪の下より23cm×28cm、厚さ5cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は600gを量る (B34)。石造物は前述の地輪1基のみである。

24号墓 (第68図、図版第四
①)

24号墓はC群中央部に位置する。25号墓の南東に造り出しのような形で造営される。したがって北側は区画がなく、東側は25号墓の東辺から派生するように20cm～30cmの大きさの山石が10個ほど1列に2、3mほど並ぶ。南側は20cm前後の山石3個が0.8mほど並び、西側には区画の



第69図 坂ノ下中世墓C群25号墓実測図 (縮尺1/25)

石がない。区画と考えられる石は標高61.52mから61.70mの間に位置する。区画内南側で、地輪1基(S48)が標高61.52mから61.70mの間に位置する。地輪の下より15cm四方、厚さ3cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は300gを量る(B35)。区画内中央では大甕の底部片が標高61.40mから61.52mの間に位置する。大甕の底部片内より骨片が出土している。骨片の総量は77.5gを量る(B36)。区画内北側で地上に石造物などの標識がなく、標高61.44mを検出面として、24cm×23cm、厚さ5cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は160gを量る(B37)。なお、区画外東方に火輪1基(S49)があるが、本遺構に伴うか否かは不明である。

25号墓(第69図、図版第四二②)

25号墓はC群北部に位置する。西側に30cm前後の山石7、8個が1列に2～3mほど並ぶ。北側と南側には山石が集中し、それぞれ区画の北辺と南辺にあたると考えられる。南北長2.6m、東西長2.6mを測る方形区画を早する。区画の石は61.30mから61.70mの間に位置する。区画内中央から北側にかけて地輪3基(S55、S57、S60)が並ぶ。北側の地輪(S60)は標高61.47mから61.70mの間に位置し、地輪の上に火輪1基(S61)が正位でいる。地輪の下より17cm四方、厚さ6cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は200gを量る(B40)。中央の地輪(S57)は標高61.44mから61.60mの間に位置し、地輪の上に水輪1基(S58)がのる。その西側には火輪1基(S59)が転落した状態で存在し、火輪と水輪、地輪は対になると考えられる。地輪の下より12cm四方、厚さ4cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は2.6gを量る(B39)。

南側の地輪(S55)は西方へ傾いているが、ほぼ原位置に近いと思われる。標高61.42mから61.60mの間に位置する。地輪に一部重なって火輪1基(S58)が存在する。水輪はないものの、火輪は地輪と対になると考えられる。地輪の下に骨片は存在しないが、長さ20cmほどの短刀が出土している。ここでは墓の遺構として扱ったが、この五輪塔に関しては供養塔として建てられた可能性がある。

区画内南端には周囲を山石に囲まれて石仏1基(S50)が標高61.32mから61.75mの間に位置する。石仏前面の下部、15cm×18cm、厚さ5cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は100gを量る(B38)。

第7節 中世墓D群

本群は調査区の北半分を占め、方形区画墓7基(うち集石墓3基)、大型の方形区画墓(基壇状遺構)1基と五輪塔・板碑・石仏などで構成される石造標識墓25基の総数33基を数える。基壇状遺構の26号墓は東側の調査区外へ延びると考えられるが、D群そのものが東側の調査区外へ広がるか否かは確認できず、その可能性は低いと考えられる。

本群の北側は急斜面となり、南側はA・B両群の間に幅2mほどの空白地帯がある。また西側には6.0m×3.2mの半円形を早する平坦部があるが、中世墓は存在しない。つまり本群の遺構は標高60.30mから62.50mの間の緩斜面に意図されて造営されたと考えられる。

前述のように斜面に広がる本群は、群内に展開する遺構の形態が方形区画墓(集石墓も含め

て)・基壇状遺構・石造標識墓と本中世墓群で確認されたすべての形態が確認されている。このことはC群が近接した時期に造営されたものでもなく、同じ集団が造営したものとも考えられない。

このように形態も異なるとともに、造営に際して中軸の方向も若干異なる。53～58号墓の6基の中軸は調査区に設定したグリットラインにほぼ平行となる。これに対して、52号墓と27～47号墓の石造標識墓群の21基はグリットラインより、約15度前後中軸を北側から西方へ振って造営される。つまりD群は形態の違いのほか、造営の違いは中軸の方向でも大きく2つに分けることができる。

27～51号墓までの石造標識墓群25基は方形区画墓や集石墓などのように面的に遺構を造営せず、基本的には石造物に骨片が伴うのみである。ここでは骨片の有無にかかわらず、原位置をほぼ保つと考えられる石造物、蔵骨器の1基を各々1基の墓として報告する。

石造標識墓群は配列や造営の方向などから西列、中央列、東列の3列・9グループに分けることができる。西列は27～30号墓、31～33号墓、34号墓、35～39号墓の4グループ、13基で構成される。中央列は40～44号墓、45号墓、46・47号墓の3グループ、8基で構成される。東列は48・49号墓、50・51号墓の2グループ、4基で構成されるが、配列の中軸が西列・中央列とは異なり調査区設定のグリットラインとはほぼ平行となる(第71図)。しかし、墓の配置からは造営の先後関係はわからない。

石造物は組合せ式五輪塔(空風輪、火輪、水輪、地輪)・板碑・石仏など今回の調査で見られるものすべてが出土している。特に板碑は原位置を離れたものも含めて本群に限り出土している。また原位置を保つと思われる板碑・石仏は27～51号墓の石造標識墓群に伴う。39号墓では骨片を伴い、墓標と考えられるもの(第75図)、27～30号墓の西側には、骨片を伴わず板碑本来の目的である供養塔として建てられた一群と、2つの性格を確認できた。つまり板碑・石仏は従来供養塔として考えられているが、本中世墓群では骨片を伴い、明らかに墓標として用いられていたことが確認されたことは、特筆に値する。

骨片は直接土中より出土しているもの35ヶ所、蔵骨器等に埋納されているもの6ヶ所の計41ヶ所で出土した。蔵骨器は42号墓では地輪直下より出土しているが、35・38号墓では石造物の横で並立するような状況で出土している。隣接する36・37号墓の地輪上面と蔵骨器の口縁の先端がほぼ同じ高さで、五輪塔などの石造物に隣接して蔵骨器を覆っていた盛り土の存在が考えられる。

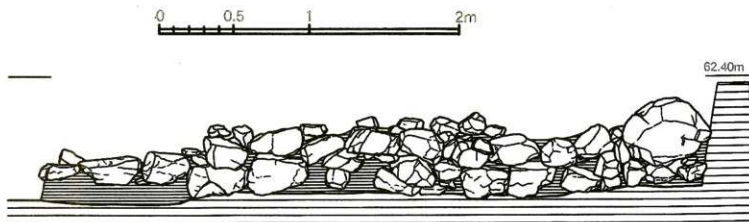
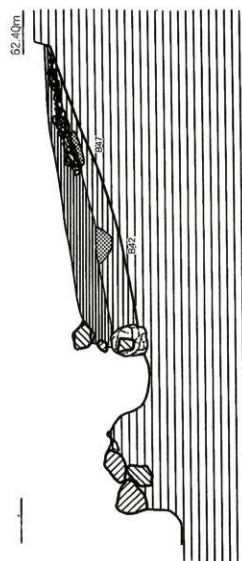
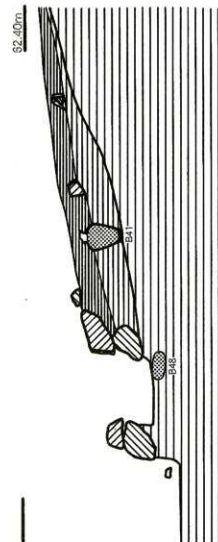
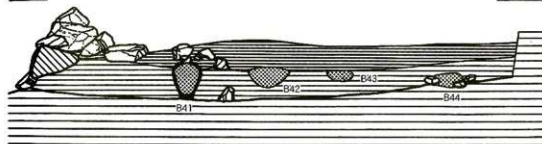
なお53号墓では納付杭が存在する。

以上のようにD群は墓の形体と構造、中軸の方向、石造物など多くの問題を有する。

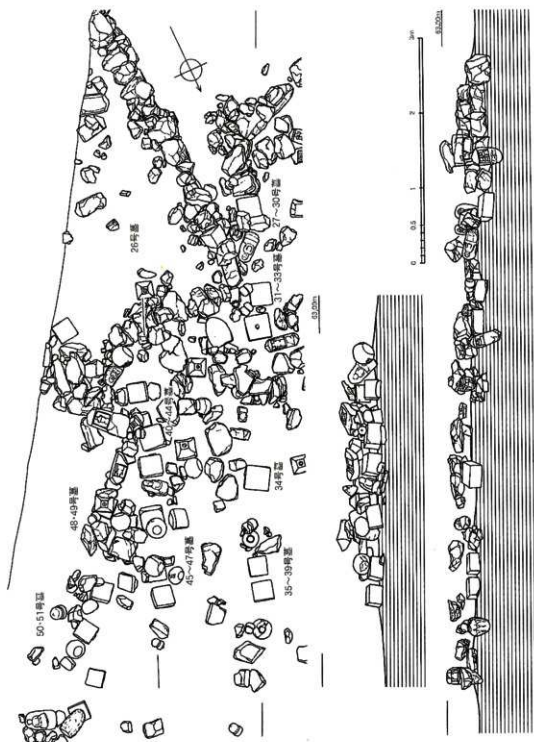
以下、個々について詳細に述べる。

26号墓(第70図、図版第四①②・四四①②)

26号墓はD群南東部に位置する。長辺9.0m、短辺4.0mを測るL字状の石列で区画し、ほかの遺構とは形状・規模ともに異なる。ここでは後述する形態から基壇状遺構と呼称することとする。短辺は長辺の北端から東西に石が並ぶ。短辺は調査区内において石列が終わる。長辺はさらに続くと思われるが調査区外となり、本来の形状・規模は確認できなかった。長辺は1段から2段に山石を石垣状に早し、標高61.60mから62.25mの間に位置する。

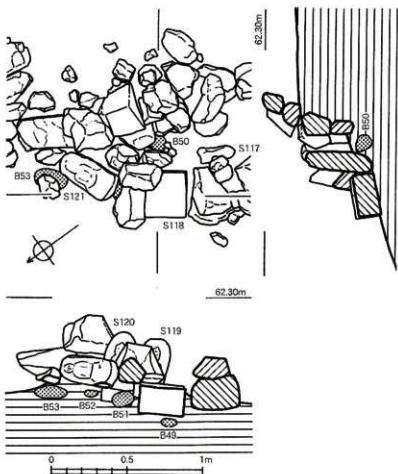


第70図 坂ノ下中世幕D群26号墓実測図（縮尺1/25）



第71図 坂ノ下中世墓D群石造標識墓群(27~51号)全体図(縮尺1/50)

またL字状石列の南西に約70cmの間をあけて、北方向から宝珠寺への入口をなすように見えるJ字状の右列がある。全長2.2mを測る。J字状石列の性格は不明だが、L字状石列と対をなし、26号墓の一部であると考えられる。石造物は本遺構の上面に火輪1基（S69）、地輪1基（S70）、板碑5基（S64・S65・S66・S67・S68）など多くが存在するが、本遺構（石垣の上端面）の検出面よりやや上層であり、本遺構に伴うとは考えられない。さらに、L字状石列の内側上面を精査したが、石造物は1基もなく、明確な落ち込み等も確認できなかったため、きの



第72図 坂ノ下中世墓D群27・28・29・30号墓実測図（縮尺1/25）

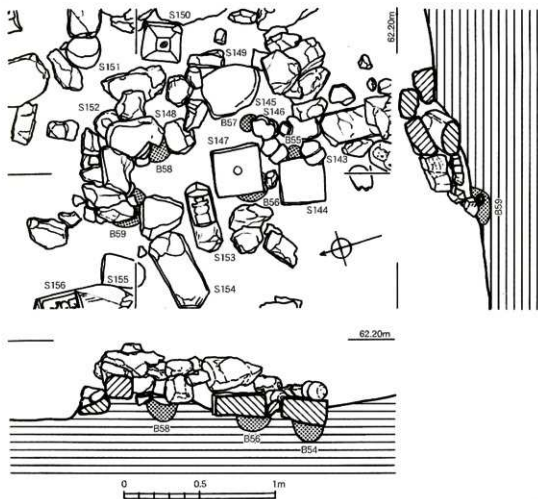
字状に切断面を設定して解体を行った。その結果、蔵骨器とその内部の土中で5ヶ所、[突の河原]を思わせる集石下より1ヶ所の計7ヶ所で骨片が出土している。蔵骨器（第87図3、図版第五十九①）はL字状石列長辺より75cm内側へ離れ、標高61.71mから62.0mの間に位置する。蔵骨器内より出土している骨片の総量は1340gを量る（B41）。L字状石列長辺と平行し、蔵骨器より南東へ40cmと90cmほど離れて標高61.90mで30cm×25cmを検出面とし、厚さ15cmで24cm×22cmの範囲、厚さ8cmで18cm×15cmの範囲の2ヶ所で骨片が集中して、土中より出土している。骨片の総量はそれぞれ440g（B42）と170g（B43）を量る。この2ヶ所よりさらに南東へ離れた調査区際、右列長辺より110cmほど離れた標高61.85mで数個の山石が巡る。この山石に囲まれて25cm×20cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は420gを量る（B44）。また蔵骨器の東側へ13cmほど離れ、標高61.90mで山石2・3個が点在する。山石の下より20cm四方、厚さ10cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は160gを量る（B45）。調査区東側際では、東端の一部が確認できなかったものの、100cm×70cmの広さに集石が広がる。

1cmから5cm前後の小さな山石・河原石を集め、石の配置等に規則性はない。あたかも「麥の河原」状を呈する。石は横高62.02mから62.25mの間に位置する。この集石の下、一部は石の間より22cm四方、厚さ7cmの範囲で骨片が出上している。骨片の総量は460gを量る（B47）。またこの集石の北方でも標高62.15mで山石数個が点在する。山石の下より15cm四方、厚さ4cmの範囲で骨片が出上している。骨片の総量は17.5gを量る（B46）。以上、L字状石列に伴う骨片の出土は7ヶ所を数え、その総量は3007.5gを量る。

さらにL字状石列の長辺前面、J字状石列との間でも標高61.52mで40cm×30cm、厚さ10cmの範囲で骨片が出上している。骨片の総量は2580.0gを量る（B48）。

27号墓、28号墓、29号墓、30号墓（第72図、図版四五①②）

D群石造標識墓群西列、26号墓のL字状石列とJ字状石列の西側に27号墓、28号墓、29号墓、30号墓の4基が位置する。27号墓の地輪（S118）の東側背後に28、29号墓の石仏（S119、S120）がほぼ原位置と考えられる状態で並列する。27号墓の北側に30号墓があり、石仏（S121）は横転してい



第73図 坂ノ下中世墓D群31・32・33号墓実測図（縮尺1/25）